

高梨氏館跡発掘調査
概 報 II

1991-3

中野市教育委員会

高梨氏館跡発掘調査

概 報 II

1991-3

中野市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、長野県中野市字小館にある長野県指定史跡高梨氏館跡の平成2年度発掘調査についての調査概報であります。
2. 発掘調査にあたっては、平成2年度（1990）の県費の補助金交付をうけて、中野市教育委員会が行いました。
3. 調査主体は中野市教育委員会で、調査組織は次のとおりです。

顧 問 長野県史協議委員・山ノ内町文化財保護審議会委員長・金井喜久一郎
長野県史編纂委員（中世史担当）・法政大学史学会評議員・湯本軍一

調査団長 中野市文化財保護審議会会長・日本考古学協会会員・金井汲次

調査主任 日本考古学協会会員・檀原長則

調 査 員 ” 田川幸生

” ” 関 孝一

” ” 郷道哲章

” ” 土屋 積

” 長野県考古学会会員・池田実男

” ” 酒井健次

事 務 局 中野市教育委員会教育長 嶋田春三

” ” 教育次長・土屋練太郎

” ” 社会教育課長・小野沢捷

” ” 歴史民俗資料館管理係長・池田 剛

” ” ” 学芸員・徳竹雅之

4. 現地調査は平成2年6月21日から11月14日まで行い、その間多くの作業員の方がたにご協力いただきました。
5. 調査の指導では、文化庁文化財保護部記念物課主任調査官・田中哲雄、奈良国立文化財研究所建造物研究室長・宮本長二郎、同所主任研究官・本中真、また東京大

学文科部（国史科主任）教授・石井進、奈良県橿原考古学研究所員・北垣聡一郎、
県教委文化課・児玉卓文氏ら多くの研究者・参観者から有益なご指導・助言をいた
だき深謝いたします。なお、文中の人名は敬称を省略させていただきました。

6. 本報告書は、金井喜久一郎・湯本軍一・金井汲次の指導により、檀原長則・徳竹
雅之が執筆・編集しました。なお、刊行にあたっては湯本軍一調査団顧問に監修し
ていただきました。
7. 本報告書作成のための製図やトレースの作業は、池田実男・湯本栄一・檀原みち
江・池田きよ子・山崎のり子が行いました。
8. 写真撮影は檀原長則・徳竹雅之・藤沢高広が行いました。
9. 調査により出土した遺物の整理や測量図などの分析・検討などの最終成果につい
ては、都市公園整備事業と並行して行われている発掘調査の終了をまって、正式に
報告書として刊行する予定です。
10. なお、執筆にあたっては県史・信濃史料やその他の多くの文献を参照しましたが、
報告書の性格上、註記は省略させていただきました。また、指導者名を省略させて
いただいたところもあります。

目 次

例 言

平成2年度の調査方針	3	北面土壘東側内側の調査	29
各調査地点の発掘調査概要	3	北面土壘東側内側の調査	31
築地塀の確認調査	3	北面土壘中央側の調査	32
南面東入口の調査	4	北面土壘西側の調査	33
庭園南水路の調査	7	北面土壘西側の調査	34
庭園東側の土壘と堀の調査	10	西面土橋南側堀の調査	35
館跡東南部の調査	13	西面土橋北側の調査	38
東面入口の調査	13	主な出土遺物の調査概要	43
東入口南側堀の調査	20	中世土師器	43
東入口北側堀の調査	20	石積み	50
東面北側土壘・堀の調査	21	石 臼	52
北東土壘外の角石積み調査	23	珠州系陶器	53
北面東内側角土壘の調査	24	むすび	61
北面東側土壘の調査	27		
北面北側土壘の調査	29		

挿 図 目 次

1. 中野市の中世城館・寺跡分布図	1	17. 石製品実測図	42
2. 館内調査地点全体図	2	18. 南面東入口堀土器出土の位置図	42
3. 南面東入口の遺構図	5	19. 中世土師器実測図	44
4. 庭園南側水路実測図	9	20. "	45
5. 東入口の調査全体図	15	21. 中世土師器・珠州系陶器の実測図	46
6. 東入口内側出土品実測図	19	22. "	47
7. 陶磁実測図	20	23. 古銭拓影図	47
8. 東面北側土壘・堀の調査全体図	22	24. 石臼実測図	52
9. 北面東側土壘内角の平面図	24	25. 陶磁器・土器拓影図	54
10. 銅製品実測図	26	26. "	55
11. 北面東側土壘・堀の調査全体図	28	27. "	56
12. 北面土壘中央部の調査全体図	32	28. 南面土壘・堀実測図	63
13. 西面北入口南側の堀調査全体図	37	29. 東面土壘・堀実測図	65
14. 西面北入口土橋北側の調査全体図	39	30. 北面土壘・堀実測図	67
15. 北面土壘西側の調査全体図	40	31. 東面土壘内部石積み実測図	69
16. 西面北入口の調査全体図(1989)	41	32. 東面北側土壘・堀の調査全体図	71

表 目 次

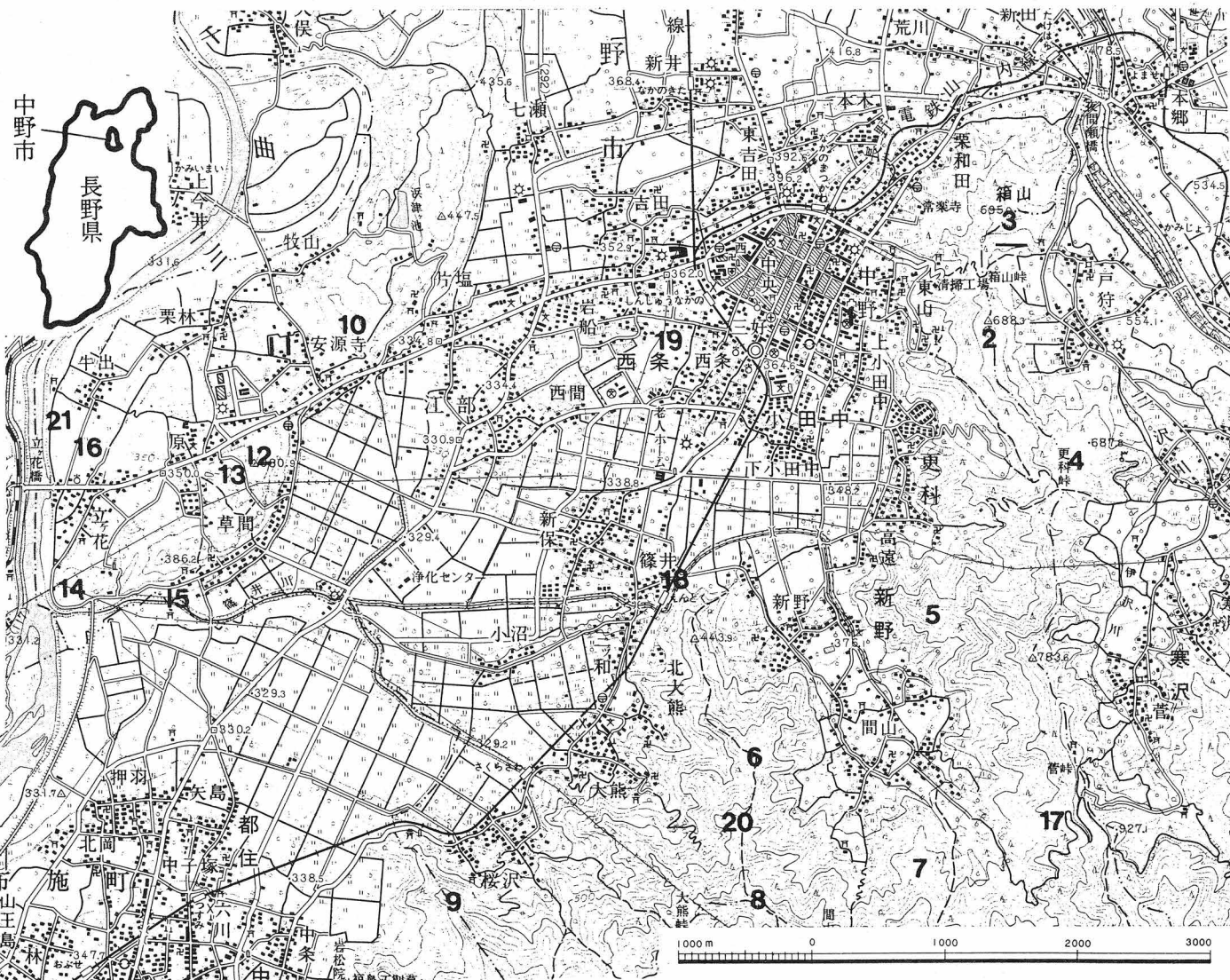
1. 東入口中央部土層と出土品	19	4. 東面北側土壘	22
2. 東入口内部の出土遺物	19	5. 陶器・土器の種別など	57
3. 陶磁の種別など	20		

写真図版目次

1. 築地塀の頂部	4	32. 北面東側土壘の横断面	26
2. 南から見た入口	6	33. 北東土壘の縦断面	27
3. 西側の土溜め石積み	6	34. 北面東側堀の断面	27
4. 排水口と堀の断面	7	35. 北面東内側の調査地点	30
5. 堀の南北断面	7	36. 同中央部の石積みと炭灰層	30
6. 堀の土器出土状況	8	37. 同炭灰層と夜間瀬川乱流の土砂堆積層	30
7. 水溜めと排水溝	8	38. 北面東側土壘の石積み	31
8. 排水口から見た庭園	10	39. 北面土壘中央部の石積み	31
9. 庭園の西端から見た南側水路	10	40. 同中央部出土の珠州系陶器	33
10. 南面堀南側の石積み	11	41. 同西側の石積み	33
11. 東面南側の後世補修の石積み	11	42. 同西側の石積み	34
12. 南面東側の土壘内部	12	43. 同西側石積みと西北入口	34
13. 東面南側土壘内部の石積み	12	44. 西面北入口と土橋南側の石積み	36
14. 東面南側土壘内部の石積みと炭片	12	45. 同南側断面図	36
15. 東入口の北側面	14	46. 同土橋北側の堀	36
16. 東入口の南側面	14	47. 同北側断面	38
17. 西から見た東入口	17	48. 中世土師器	49
18. 東入口内側第6層の中世土師器	17	49. 鴨ヶ嶽第3郭の石積み	51
19. 堀の東側から見た東入口	17	50. 珠州系陶器	59
20. 東入口土橋南側の石積み	18	51. 同	59
21. 同南側堀底のかわらけと鉄滓	18	52. 東入口内側出土銅塊など	60
22. 同南側の堀断面	18	53. 同玉類	60
23. 同北側の堀断面	18	54. 館内出土の中世土師器(1)	60
24. 東面北側土壘内部の遺構	21	55. 同 (2)	62
25. 同土壘断面	21	56. 東入口南側堀出土の銅製器	62
26. 同堀断面	22	57. 北面東土壘内角出土の小柄	62
27. 北面東側土壘外角の石積み	23	58. 東入口内側焼土層出土の鉄釘	62
28. 東面北側の土壘と石積み	23	59. 同下層出土の鹿角	62
29. 北面東側土壘内角の石積み	25	60. 同出土の諸品	62
30. 同土壘の断面	25	61. 東面南土壘内出土の銅環	62
31. 同土壘の断面	25	62. 東入口南側石積み出土の鎧	62

図1 中野市の中世城館・寺跡分布図

1. 高梨氏居館跡
2. 鴨ヶ嶽城跡
3. 箱山砦跡
4. 菅城跡
5. 道光砦跡
6. 小曾崖城跡
7. 眞山城跡
8. 沼の入城跡
9. 二十端城跡
10. 安源寺城跡
11. 安源寺館跡
12. 茶臼峯砦跡
13. 大久保館跡
14. 立ヶ花城跡
15. 草間館跡
16. 本誓寺跡
17. 建応寺跡
18. 内田館跡
19. 岩船氏居館跡
20. 西山砦跡
21. 牛出館跡



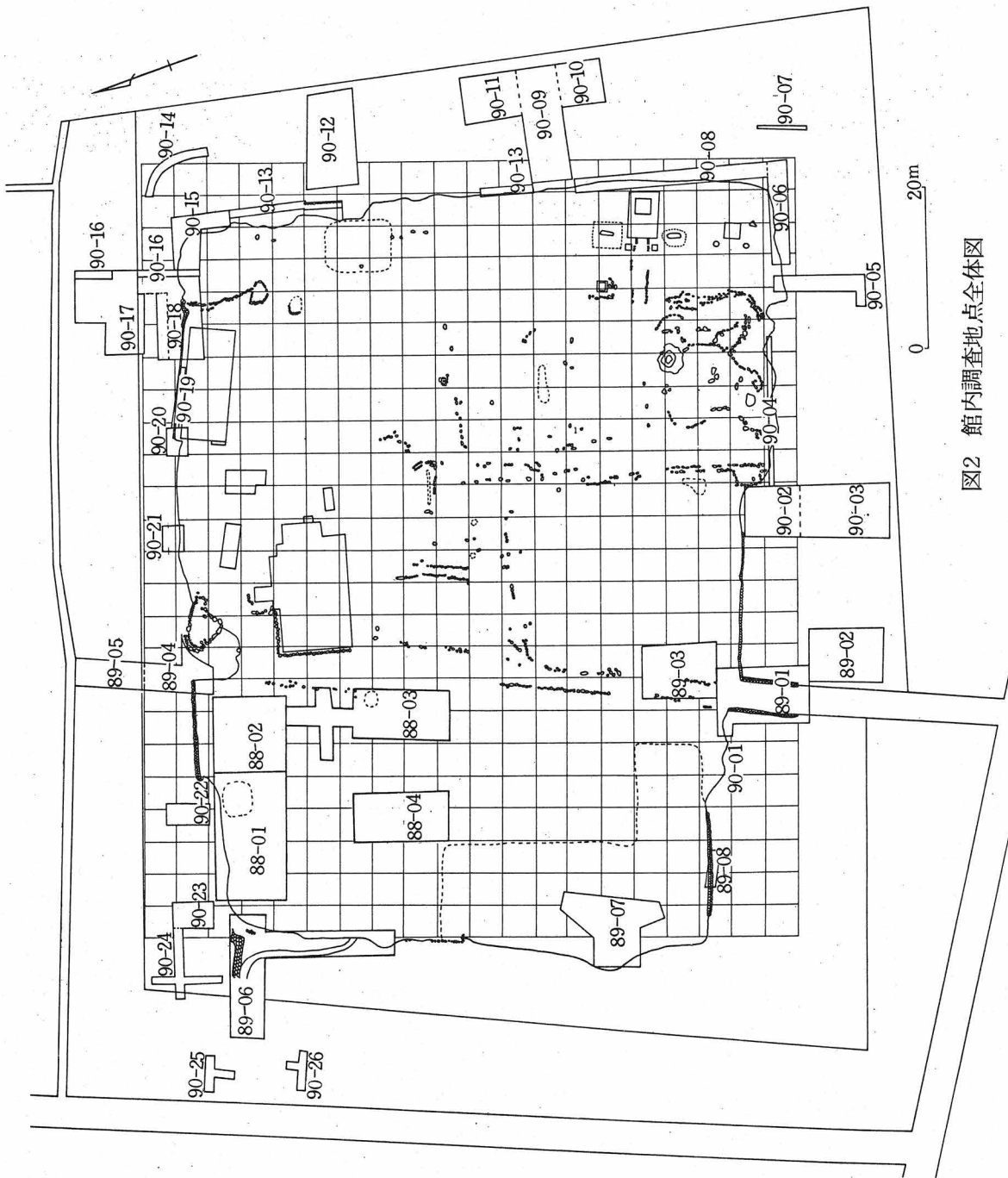


図2 館内調査地点全体図

平成2年度の調査方針

高梨氏館跡の試掘調査開始以来、5年次を迎えた平成2年度の発掘調査は、6月から11月まで行った。前年度から一部都市公園の工事施行も始まっていたので、この工事と発掘調査との調整が必要となってきた。このため調査団会議などで検討した結果、今年度の調査の重点は、土塁・堀の構造を明確化する調査を行うことに決定した。というのは、前年度の調査でも、土塁の一部分を切断し堀を掘り下げてみたが、さらに十分な検証を得ることが必要となったためである。

各調査地点の発掘調査概要

築地塀の確認調査（90-01）

前年度、これまで南からの通用口として使用されてきた入口（7.8 m）両側（東西）の土塁を調査した。その結果、両側の土塁中心部から築地塀が検出され、上部がわずかに崩れた状態にあることが確認された。

この入口の内側に、小さな池や配石が認められ、戦国期にはここに虎口の存在した可能性が少なくなった。その他の地点の土塁からは、築地塀跡が確認されなかった。この築地塀の長さを調査するため、1 m²のピットを入口両側に4カ所設定して発掘した。その結果、上層は砂利層であって、東側築地塀の面から東へ3～4 m延長した箇所からは検出されなかった。しかし現在の入口（幅7.8 m）の西側から西へ4.56 mの位置の1 m²ピットにおいて砂利層を掘り下げたところ、深さ70 cmの位置から築地塀の上端部が検出された。

しかし西方14.10 mの1 m²ピットからは検出されなかった。この結果、築地塀の長さは20 m程度と推定された。その西方は土塁が整備されたため、追跡調査ができず不明である。ここから西南の土塁内角までの距離は、約15 m余を残すのみである。



1↑ 築地塀の頂部(90-01)

南面入口(虎口)の調査(90-02)

庭園の西南部に位置する土塁は、西側部分は高さもあり、幅も広いが、庭園の南側土塁は低くなっている。これは庭園の修景の必要から生じた結果だろうと指摘されている。

このため、この部分から東方の庭園敷地は、約3m南側に広がって鍵形になっている。ここを究明する目的で、ここに調査地点を設定した。

この調査幅約6mは、庭園に使用された石の破片、五輪塔の台石(地輪)3、火輪1、不明加工石1などが、大小の河原石に混じった状態にあった。それは、この入口(虎口)が後に塞がれて土塁が構築されたためである。

これらを取り除くと、入口の西側に長さ6.5m、高さ0.6mの石積みが見られたが、東側は石礫が混在していて不明確であった。けれども比較的大きな根石が存在していることから、幅3m程の入口があったと推定される。そして西側石積みに接して門の礎石と思われる石もあった。

この入口外側の堀にも長さ11mの石積みが見られた。入口の東側には排水路があり、縦横約1mの蓋石2枚が架設されていた。

堀部分の調査(90-03)

この堀幅は10.5mで、上層部は最近の廃棄物で埋められ、その下層に大きな石礫が埋ま

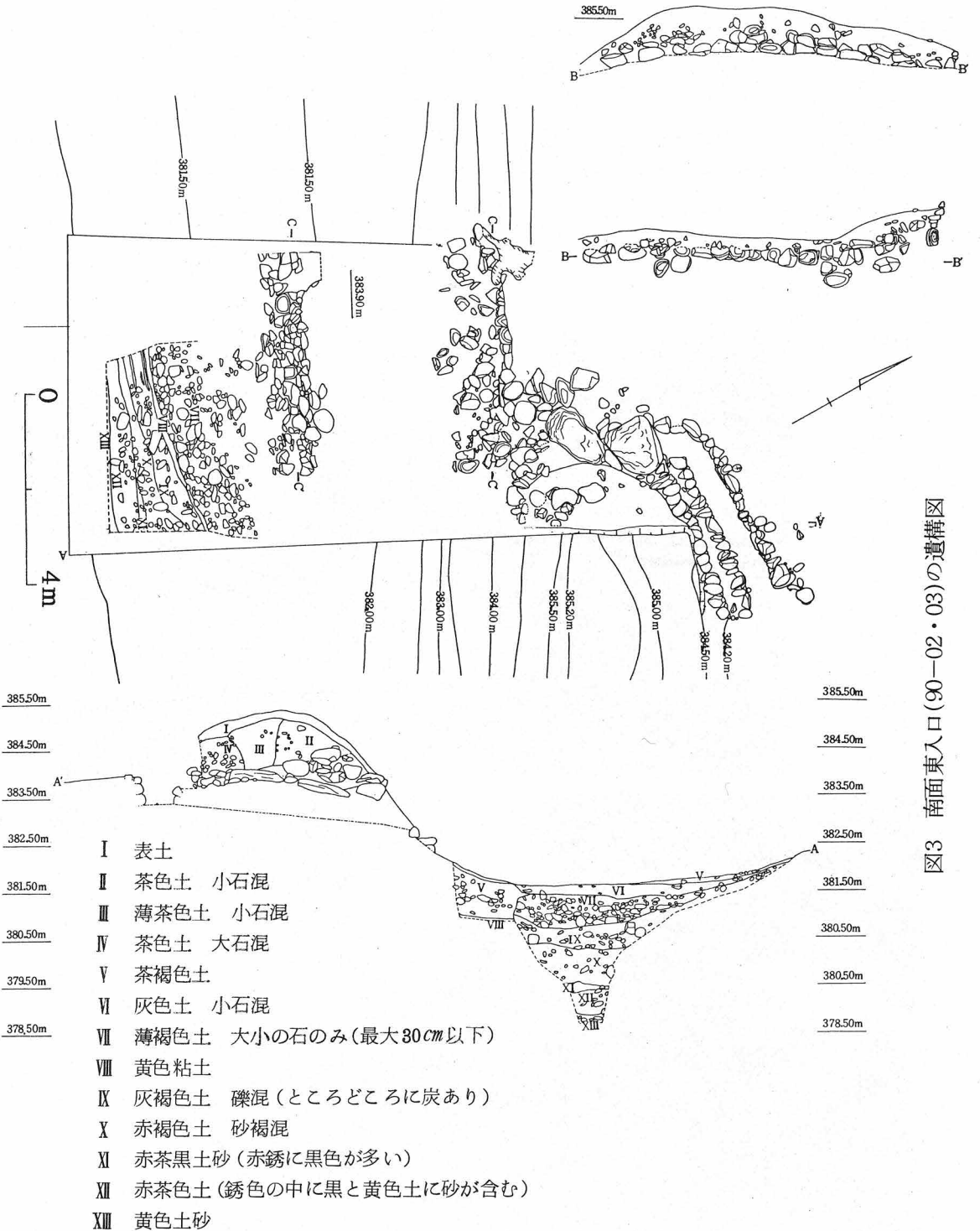
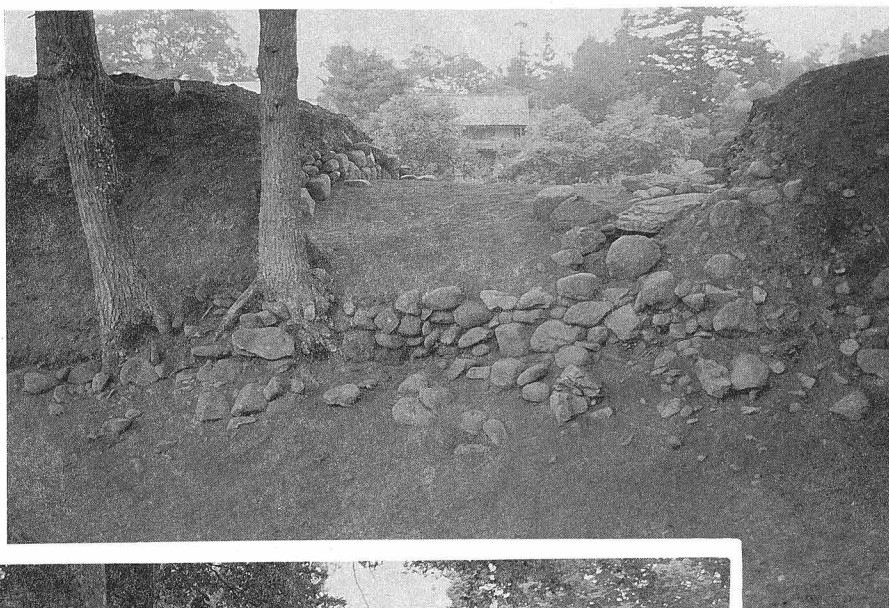


図3 南面東入口(90-02-03)の遺構図

っていた。この下部に黄色粘土層（厚さ約10cm）が、土塁側の調査地東から西に傾斜して存在した。さらにその下層にも旧状の掘があり、したがって黄色粘土層は、当初の掘がある程度埋まった状態のところ存在したことになる。この掘切断部の位置では、土塁上からの落差は約7mある。また木橋杭あとの検出にも努めたが、発見はできなかった。

前述の排水口の下方は斜状の黄色粘土層で、その下層の石礫層とは断層をなし、その下部に比較的大きな石が並べたような状態で落ち込み、埋まっていた。粘土層の性格を究明するため、これを取り除き調査可能面積約3㎡を確保した。この結果、粘土面の上には中世土師器が集中し、径5～7cmのものが45個以上、10～11cmのものが14個以上と計59個以上、その中には6個、3個と重なって存在していた。これらは、油煙痕・使用痕のみられないものであった。

2→ 南から
みた入口



3← 西側の
土留め
石積み

庭園南水路の調査 (90-04)

東方から設けられた導水路は、水溜めで水位を調節し、庭園の東南部で流れを西に変え、分水柵を設けて池に注ぐ。余水は土塁に沿ってゆるいS字状の水路を流れ、庭園の西、つまり北方の建物跡からの排水路と水溜めとが接続する場所において、S字状の水路と合流して前記排水路に流れ込んでいる。

この庭園南側部分の水路幅は15~50 cm、深さは70 cmにおよぶ箇所があり、勾配は12/50、両側に河原石を並べている。水溜めの下流は幅50 cm、深さ50 cmで、南面東入口の暗渠排水路に通じている。この南側の石積み(河原石)に混じって、根石に五輪塔の地輪2個が転用されていた。

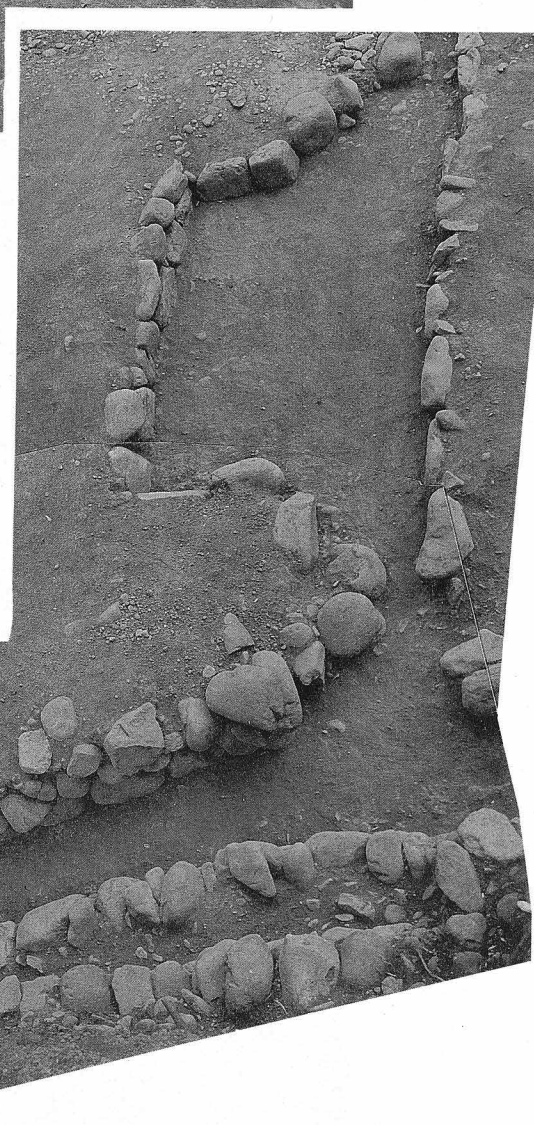


4 排水口と堀の断面
黄色粘土層と石列の間から
中世土師器が
多量に出土する

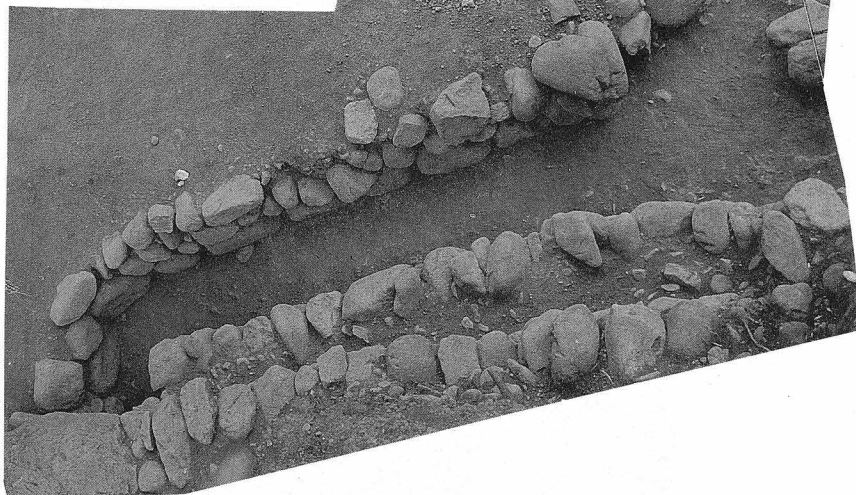


5 → 堀の南北断面

6← 堀(90-03)
の土器出土
状況



→ 水溜めと排水溝



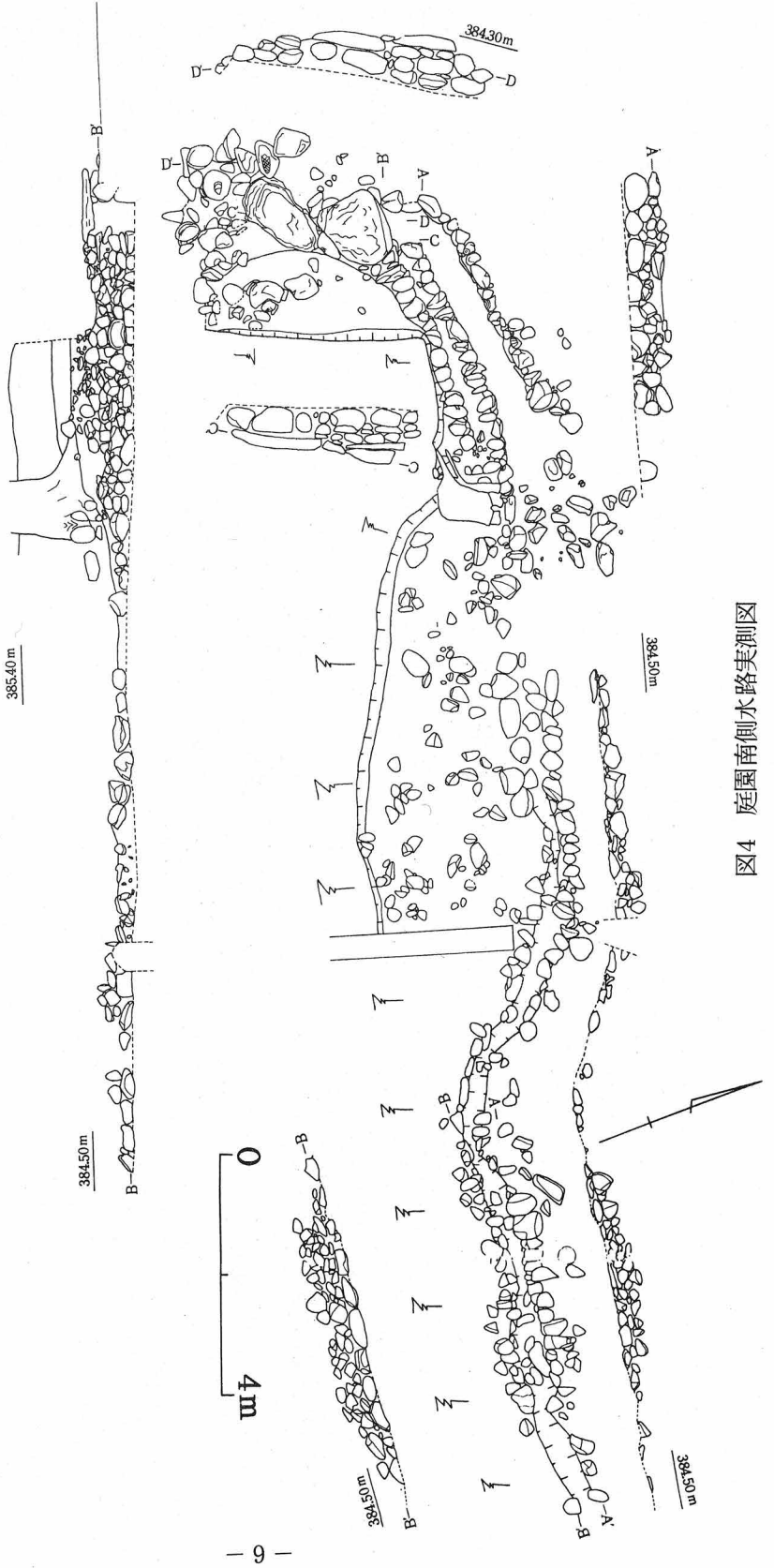


图4 庭園南側水路実測図



8← 排水口から
見た庭園



9 ↑ 庭園の西端から見た南側水路

庭園東側の土塁と堀の調査

(90-05・06)

この部分の土塁の高さは、内部から現状 60 cm の高さで、表土を剥いだ面からは 1 m 程である。土塁幅（基底）は 3.5 m 程で、土層は大小の石礫で構成され、普請に意を用いた様子はみられない。また、内部に石積みは確認できなかった。この西方の旧地形面と同じレベルの堀側に庭石と同類の石が 2 個露出していることが注目される。

堀の断面調査では、堀底を確認すると、土塁上から深さ 6.2 m であった。南側の地表面からの深さは 4 m で、この面から張り出すように石積みが発見された。長さ約 5 m、高さ 1.1 m、粗雑な落とし積みに類する手法の積み方で、近世以降の遺構と

推定される。この遺構があるため、堀の断面形状は、これ以上追求できなかった。

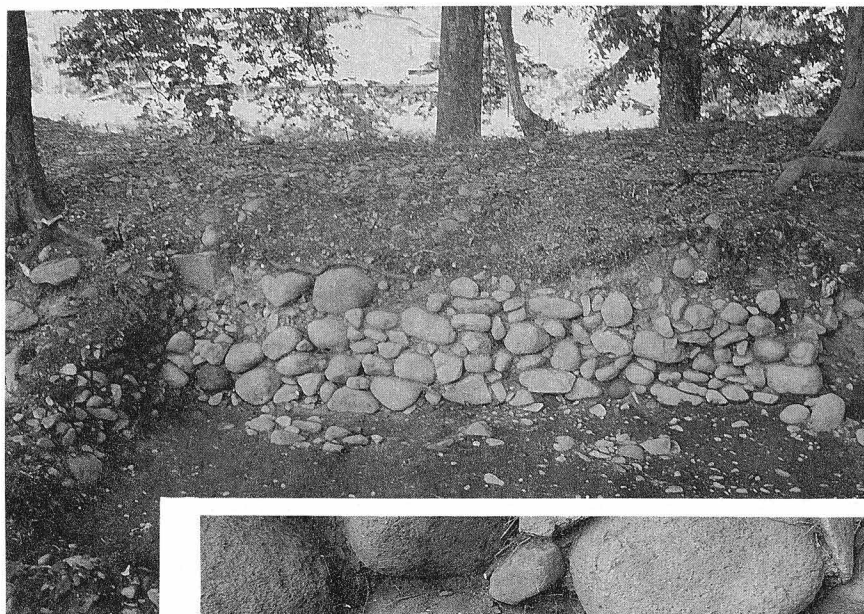


10↑ 南面堀南側の石積み(90-05)



11↑ 東面南側
(90-06)の後世補修の石積み

12→ 南面の
土塁内部



13← 東面南側
土塁内部の石積み
(積みなおしか)

14→ 東面南側
土塁内部の
石積みと炭片



館跡東南部の調査（90-06・07・08）

ここは稲荷社のある裏手で、南東の土塁外角部を構成している。堀側の土塁稜線裾部の南と北側に近世以降の石積みが残されている。この石積みは土塁の崩落を防ぐため、斜面に沿って積まれているので、その時期も推定できそうである。

土塁内部の調査では、積石大の石が多数あり、中世土師器片や炭片などを包含する黒土層もみられるが、石積みは確認できなかった。この角から東面にかけての土塁はやや高く、この角の土塁中段に山石の平石1個があった。ここから東面土塁裾部の石積みは、石が小さくて、不規則であり、上段部は明治以降の積み直し（北垣総一郎氏）との指摘があった。この北側の土塁上には、東町の金井志げ寄進の二十六夜塔・石祠などがある。

東面入口の調査（90-09）

この入口（虎口）は東面土塁のほぼ中央にあって開口し、東方の山麓まで300mである。その先は鴨ヶ嶽の段郭や砦が断続している。

この入口内側からは、昭和62（1987）年の調査の時、中世土師器が集中して出土した。

東南角から続く土塁内部の石積みは、あまり保存状態が良くなく、崩落した部分が多い。この傾向は入口から北の部分にもしばらく続く。この入口部分は多くの改変をうけたらしく、両袖石積みの根石の深さが違っていたり、内部北側の石積みが二重になったり、石列も一部並列している部分があった。

北側石積みは根石部分が残りに、深さもある。石積み線の中央奥に長径0.9m、幅0.6m程の山石があるが、東側部分には石積みは残っていない。南側石積みは第3層上にあり、根石が浅く、内部に開いた形となっている。これまで確認された入口は、すべて片側が内部に開く形式である。

通路部分の東方中央に、排水路状に2列の石が並んでいる。石列のない中央西部分については、7層に分けて掘り下げてみた。（第1表）

この遺物層は4～6層で、出土遺物は第2表のとおり多種にわたっている。主な遺物について記すと、まず「洪武通宝」であるが、これは洪武元年（1368）に初鑄されている。このうち焼土層出土の白磁・青磁・染付は細片で、火熱をうけて変形している。白磁皿（図6）は口縁が端反りした器形で、一乗谷朝倉氏館跡出土品の中にもあり、15世紀末から16世紀前半の間のものとみられている。

御正体（かけぼとけ）の吊^{つりかんざ}鑲座は吊鑲・切子頭の吊鑲台からなり、鏡板を止める座金は菊座に作られている。この類例は、大町市の仁科神明宮の金剛界大日如来像御正体（重文指定番号-1）にみられ鎌倉初～中期（12世紀中葉）の製作とされている。

ガラス玉などは御正体の天蓋の飾り、または仏像の天冠台（宝冠）・耳^{じとう}瑠（耳飾り）・

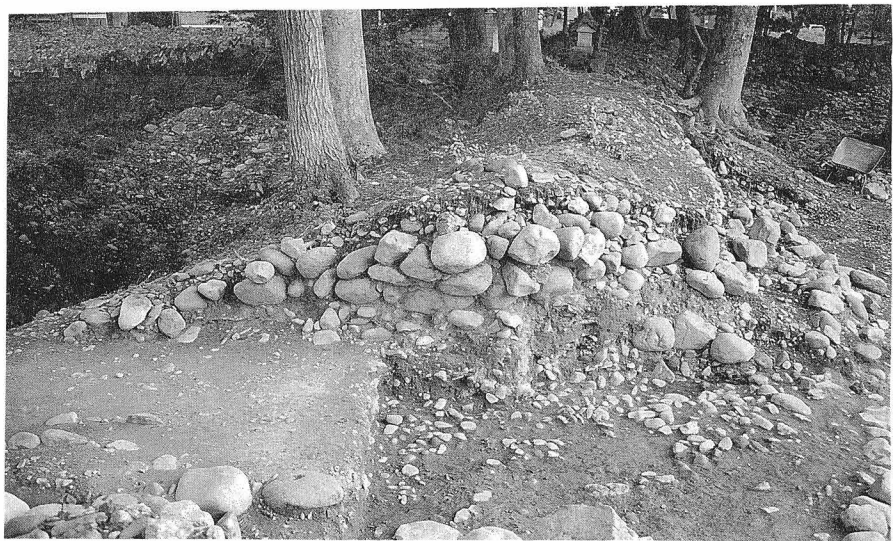
ようらく
瓔珞（胸飾り）などの装身具にみられるものである。瑞雲文の石片も、仏像の光背こうはいの一部と考えられる。これらの銅金具片や銅塊は、御正体や仏像あるいは荘厳具が、火熱によって溶解したものとすれば、この附近に仏堂の存在した可能性も考えられる。

鹿角は焼土層の下から中世土師器・炭片などとともに検出されたものである。このように祭祀に用いられた例としては、諏訪大社御頭祭の十間廊における饗膳の式の鹿の頭、御杖進の供進品にもみられる。永禄8（1565）年の諏訪大社に関する武田信玄下知状にも、供進品の中に「鹿の頭」が見える。



15← 東入口
(90-09)の
北側面

16→ 東入口の
南側面



- I 表土
- II 暗褐色土 小石混り
- III 茶黒土 小石混り
- IV 黄色土
- V 暗褐色土 小石混り
- VI 薄茶粘土
- VII 灰茶色土 粘土
- VIII 茶褐色土 小石混り
- IX 赤茶砂 小石銹土



図5 東入口の調査全体図

17→ 西から見た
東入口



18← 東入口内側
第6層の
中世土師器

19→ 堀の外側
から見た東
入口土橋中
央の石積み



20→ 東入口土橋南側の
石積み



21↓ 同南側堀底
のかわらけと鉄滓



22→ 同南側
(90-10)の堀断面



23→ 同北側
(90-11)の堀断面



表1 東入口中央部土層と出土品

層位	土層	出土遺物
第1層	表層 5 cm	遺物無出土
2	砂利層 20 cm	現代ガラス・陶器
3	砂利の多い土層 13~15 cm 中央北部分黒褐色土 南部分黄褐色土(山上)・鉄滓	
4	砂利層(堅) 15~23 cm	炭・洪武通宝
5	砂利堆積層 東部分砂利・土、西側焼土	炭・中世土師器・染付・青磁・銅破片その他
6	砂利の混じった土層	中世土師器
7	砂利層	以下無遺物

表2 東入口(虎口)内部の出土遺物

遺物名	数量	備考
中世土師器	多数	鎮壇具 底に八方に線を入れたかわらけ脚付(香炉)、白色土器もある。
鉄滓	1	
鉄釘	数点	焼土層
白磁	"	"
青磁	"	"
染付	"	" (図6-6)
瑞雲文石片(頁岩)	1	" (同-4)
硯片(頁岩)	2	"
ガラス小玉	12以上	" 径3 mm前後、青色その他
珊瑚玉	1	" 径1 cm (同-3)
銅釘	"	"
御正体吊環座(銅)	1	" (同-1)
銅鋌	1	" (同-5)
銅金具片	数点	" (同-2)
銅片	多数	" 球状その他
洪武通宝	1	
鹿角	1	
炭片	多数	

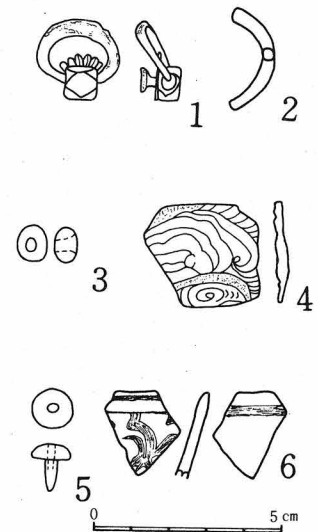


図6 東入口内側
出土品実測図

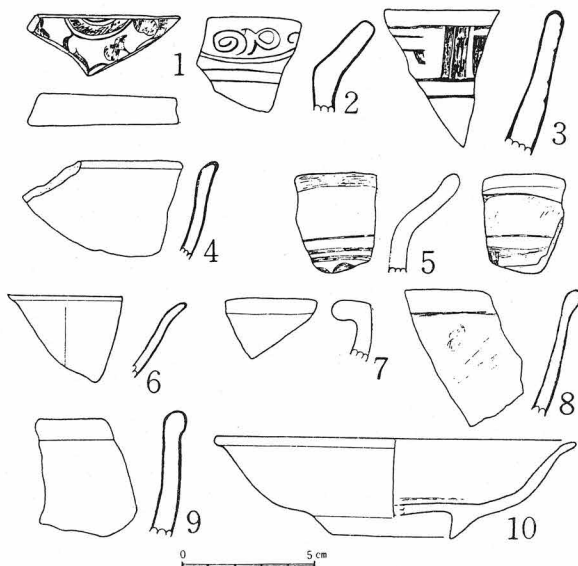


図7 陶磁実測図

陶磁の種別など

図番号	種別	出土地点	器種	備考
1	染付	東入口焼土層	盤底部	2次火熱品
2	青磁	東入口北側堀	鉢口縁	"
3	"	東入口焼土層	"	"
4	"	"	碗口縁	"
5	染付	"	鉢口縁	2次火熱品
6	白磁	"	碗口縁	"
7	青磁	庭園池北	鉢口縁	2次火熱品
8	青磁	東面土壘外側下層	碗口縁	"
9	"	北面土壘内側下層	"	"
10	白磁	東入口焼土層	"	2次火熱品

東入口南側堀の調査 (90-10)

この入口（虎口）の土橋の中央には南北に石積みがあり、その東側は石礫の少ない砂壤土で埋まっていた。隣接地が未調査なのでまだ確認できないが、小さい橋の存在も考えられる。土橋南側は多数の大小の石で埋められ、長径0.8m、厚さ10cm程の安山岩の平石もみられる。これを取り除くと、土橋南側から長さ2m、高さ0.7mの石積みが現われた。この石積みは東と西側に続いているが、両側に切断部が見られるのは、木柱などがあったためだろうか。

堀の中世層以下の出土遺物には、中世土師器・珠州系陶器・羽口・鉄滓・鉄釘・蛤貝などがみられる。

東入口北側堀の調査 (90-11)

土橋北側も多数の石礫で埋まっていた。

これらを除きして石積みの有無を確かめたが、遺構は検出されなかった。東側の堀縁に石積みが残っていた。これと外部の遺構との関係は、現在のところ不明である。

堀底部分の土砂は、鉄分が沈着して硬化していた。堀の断面は鋭いV字形にならず、U字形に近い形を呈していた。

ここからは珠州系陶器挿鉢片・羽口、中世土師器・染付・青磁・鉄滓などが出土した。

東面の北側土塁・堀の調査地点
(90-12)

土塁の内側は石積みが続いている。この土塁を切断し、堀の部分も調査した。

土塁の下層部は、礫の少ない砂利を含む薄茶褐色土であり、30~60cm堆積していた。この下部から青磁・中世土師器などが出土し、東側には積み石大の石が面を内側に向けて並んでいた。これらは土塁構築以前の遺構と考えられる。

土塁内側の石積みの手前からは、多量の炭片・珠州系陶器片などが検出されたが、床面は赤褐色に焼け、壁土片もみられた(前年焼米などが検出された東側部分)。

土塁の基底幅(敷)は6.7m、高さ1.9m、発掘した堀底から現土塁上までは4.75mの落差がある。



24↑ 東面北側土塁内部の遺構



25← 同土塁断面



26 ← 同堀断面

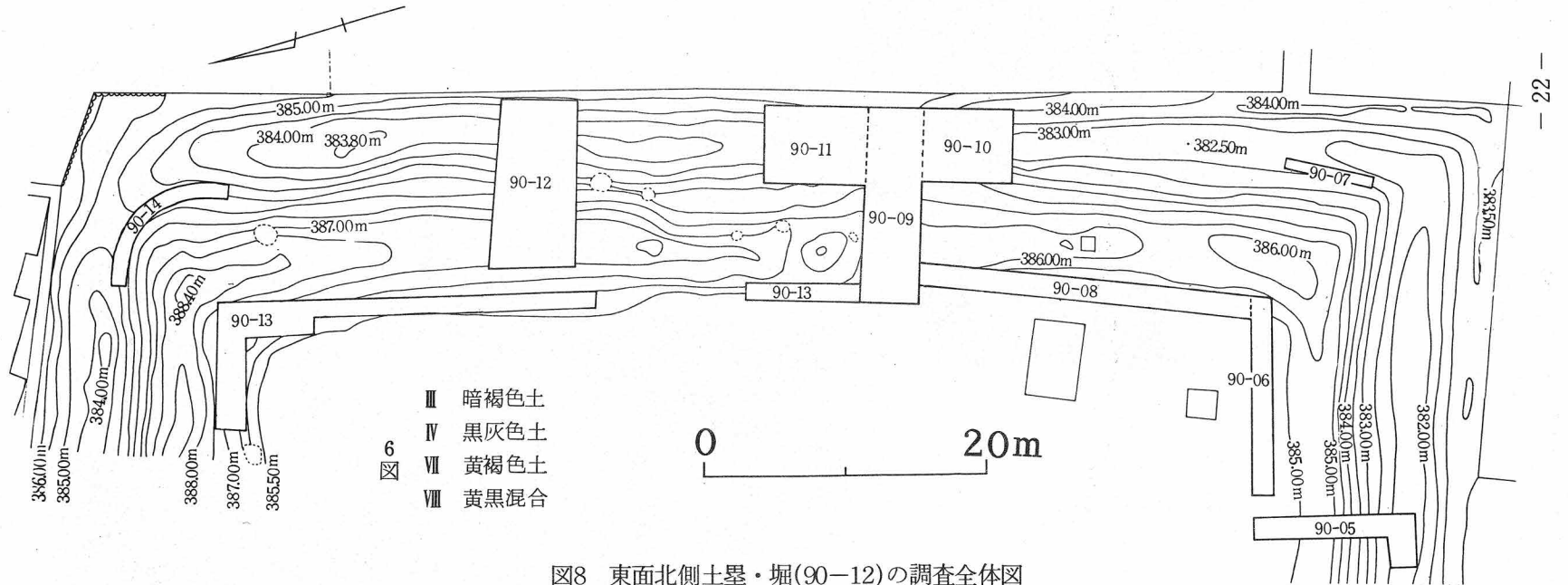


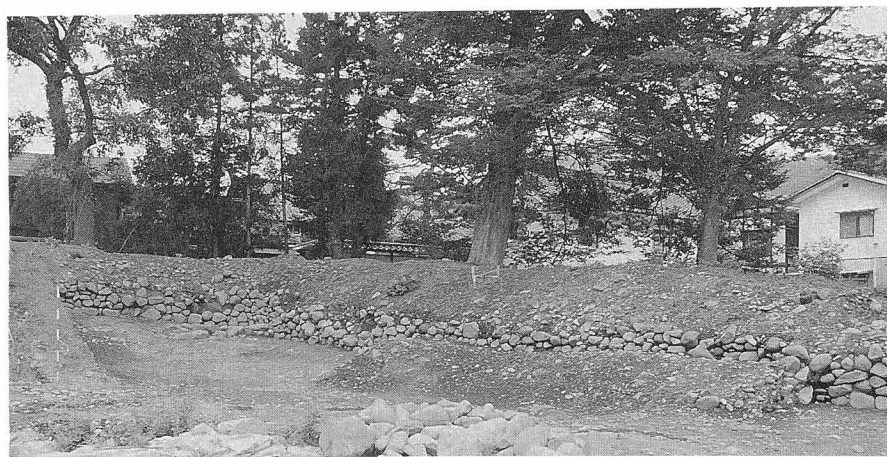
図8 東面北側土塁・堀(90-12)の調査全体図

北東土塁外の角石積みの調査 (90-14)

ここは北に住宅があり、近代以降の陶磁器などの廃棄物で埋まっていた。石積みが残っていたので根石まで掘り下げて調査したが、手法・状態などは南東外角土塁裾の石積みと同一であり、同時期のものとみられる。近代以降の構築であろう。



27 ↑ 北面東側
土塁外角の石積み
(後世の補修か)



28 ↑ 東面北側の土塁と石積み

北面東内の角土塁の調査 (90-15)

東面の土塁内側には石積みの連続が確認される。北面土塁の石積みは土塁の中段に位置するため、それに合わせて順次基底が高くなっている。その内角部石積みの前面1.5mのところ
に低い石積みが見られる。ここは丑寅の方角で鬼門にあたるので、何らかの施設があった可能性がある。ここからは、柄の部分に錫杖の文様を銀で象眼した小柄や中世土師器、元豊通宝(草書)・紹聖元宝(同)・皇宋通宝(篆書)・同(隸書)の4枚が銹合して検出された。

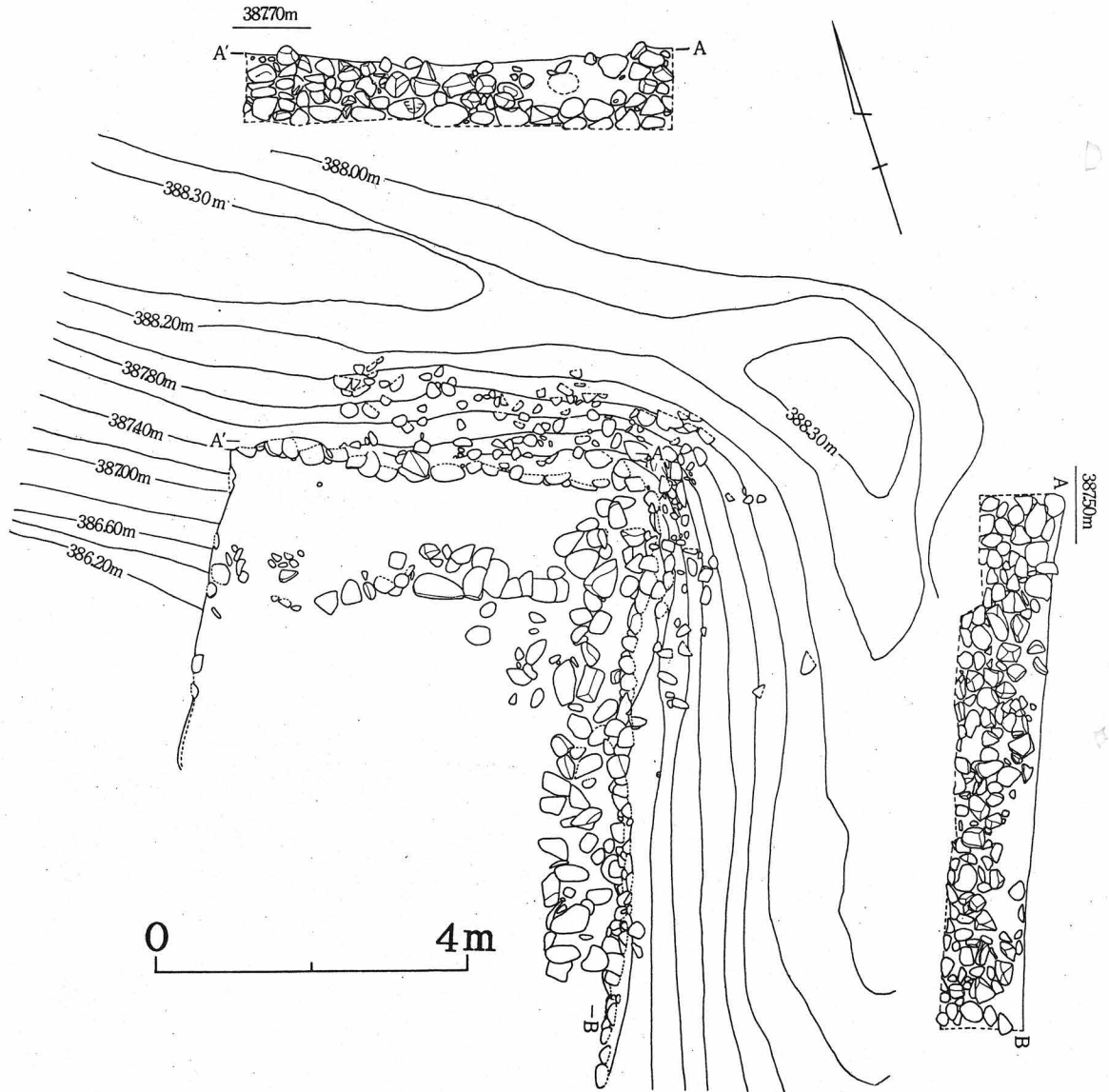


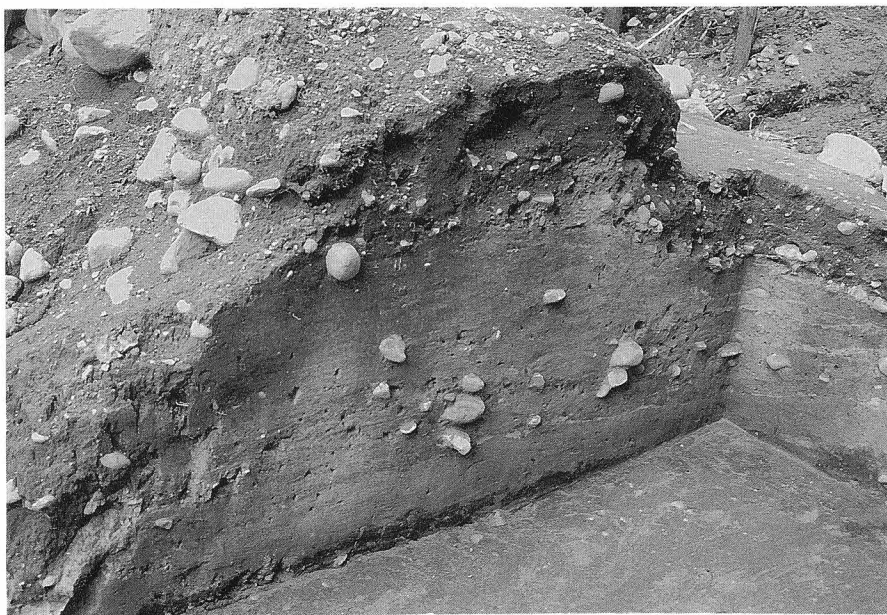
図9 北面東側土塁内角の平面図

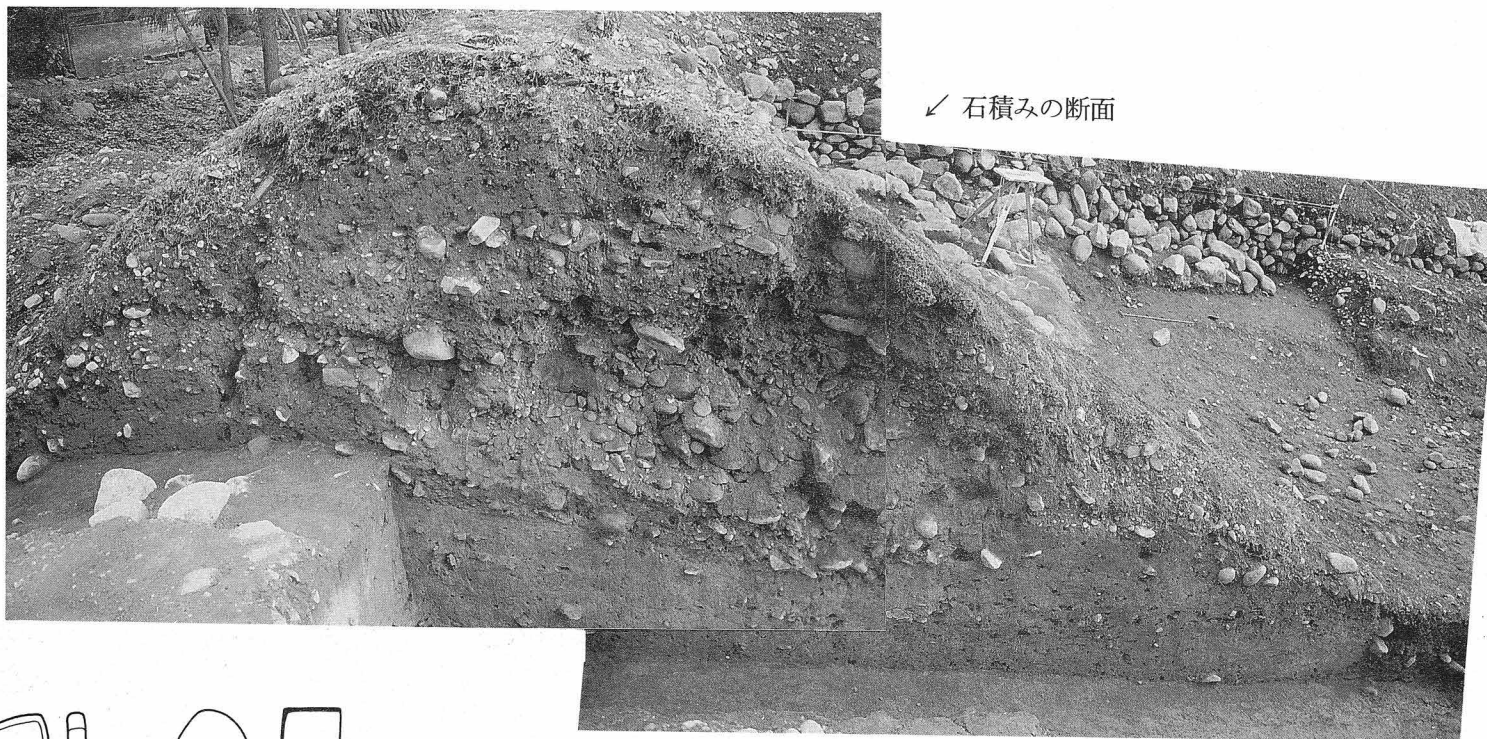
29→ 北面東側土塁
(90-15)内角の
石積み



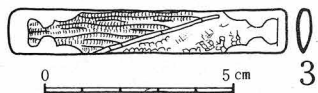
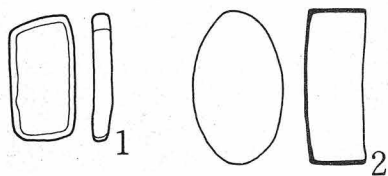
30← 同土塁(90-16)
の断面

31→ 同土塁
(90-16)の断面





石積みの断面



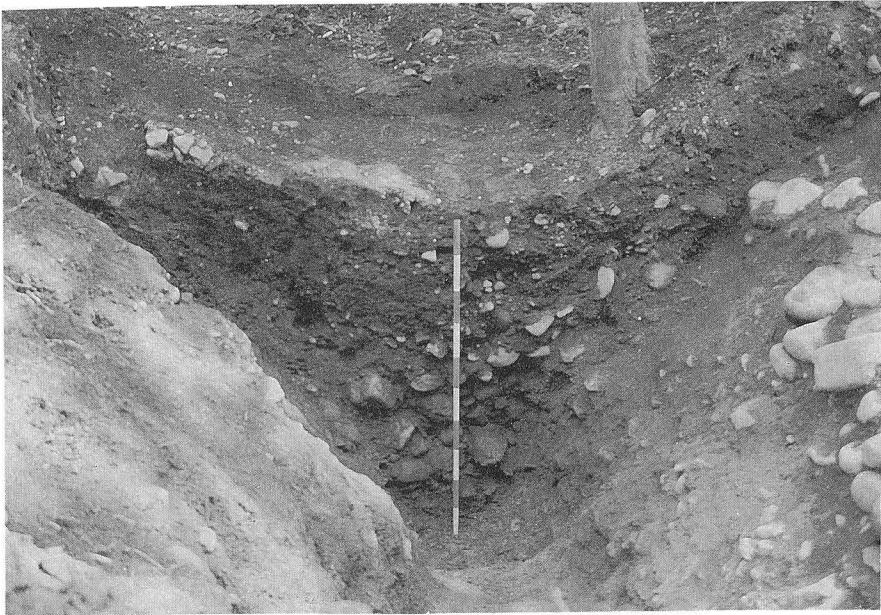
32↑ 北面東側土塁(90-16)の横断面

- 1 銅製環 東南土塁上出土
- 2 銅製錨こじり 東入口南出土
- 3 銅製小柄 北東土塁内角石積み前出土

図10 銅製品実測図



33↑ 北東土塁
(90-12)の
縦断面



34← 同東側堀(90-12)の断面

北面東側土塁の調査 (90-16)

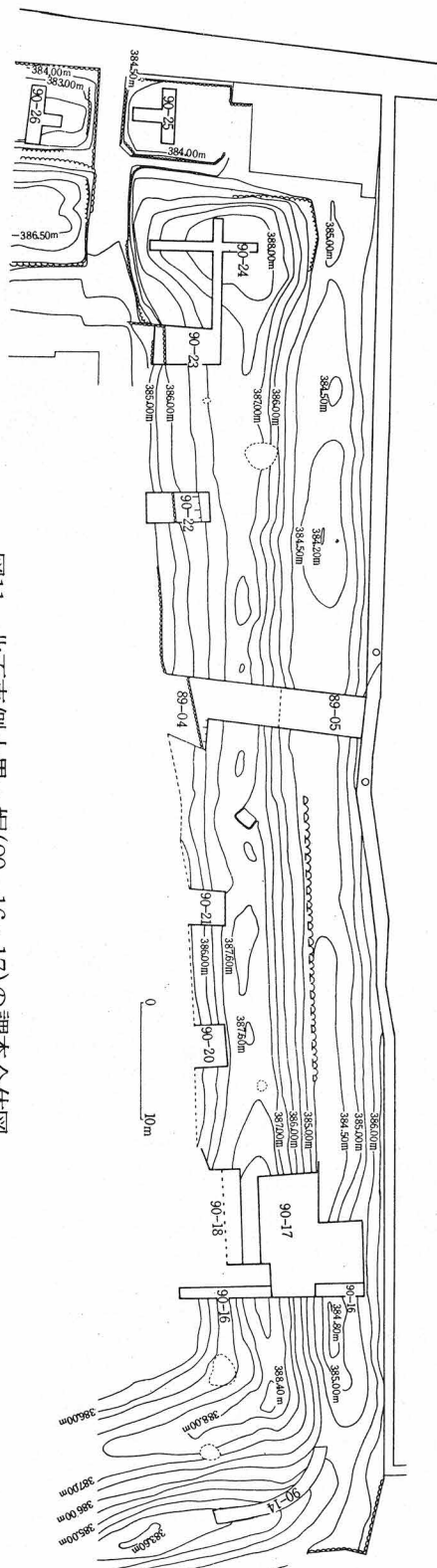
現土塁上から2.5m下までは扇状地特有の砂礫層で構成され、したがってこの部分は、同一時期に築造された可能性がある。南寄りに石積みの断面（アミ線部分）が露出しているが、裏ごめ石はみられない。

砂礫層の下は茶褐色土で、礫はほとんどみられない。これは堅く締まった土で厚さ0.75mあり、2層に分かれている。下層は粘着性が強い土で、以下淡い黒土色・砂利層となる。調査地点の北側（東西）・西側（南北）の断面は、砂混じりの黄色土が縞状に堆積していた。このことは、次に記す土盛状遺構が、土塁築造以前に存在したことを示している。

現状の土塁基底幅は8m、高さ2.5m、石積みからの土塁の厚さは3.5m、発掘した堀の底から土塁上までは5.5mの高さである。堀幅は現状6mを数えるが、北側は住宅地の影響から埋没がはなはだしい。

この断面の石積み下層から、皇宋通宝（隸書・初鑄1253）が1枚検出されている。

図11 北面東側土塁・堀(90-16・17)の調査全体図



北面北側土壘の調査 (90-17)

土壘は、長さ10mにわたり、土壘上からの深さ約2.5mについて調査した。

調査の目的は土壘上に柵列などの遺構を検出することにあつたが、痕跡は発見できなかった。崩落して失われたことも考えられる。

この断面の東半分の下層は、土壘築造以前の土盛遺構であり、現土壘とは南北方向に直交し、東側の上層には砂礫層が斜状に堆積している。この西側には南北方向に長さ1.5m、高さ60cmの石積みが見られる。さらにその先端から1m離れた西側にも高さ約70cm、長さ2mの石積みがあり、土盛り遺構の西側に続いて内部が広く、土壇状になっている。

その西側部分の下層には石積みで使用された石が散在しているが、上層部分は砂礫層で構成されている。上層部分の下層には炭灰層があり、後述する南側と同一層に連なると推定される。

ここの主な出土品は、中世土師器・白土器系の火舎（香炉）・石臼破片などである。

北面土壘東内側の調査 (90-18)

ここの土壘調査幅も10mである。東から8.7mにわたって基底部に旧土盛り遺構があり、礫の少ない土で固められていた。この西側に石積みが南北方向に長さ約2m、高さ0.9mの規模で残り、さらにその石積みの上に、土壘と平行（東西）に高さ0.8mの石積みが見られるが、かなり崩落している。

土盛遺構西側のこれら2重の石積みの下層に、長さ3.5mにわたって炭灰層が見られた。この炭灰層のなかでもそれが明らかな層は、厚さ30cmにおよぶ所もあった。ここには上幅で0.5m、深さ0.3mの柱穴状の箇所があった。この西側部分の上層は、赤茶褐色の砂礫の自然堆積層が約0.4mの厚さで、その上は人工的な層（土壘）となっている。これは、中世のある時期、洪水の乱流によってできたものとも推定される。

この炭灰層以下から、中世土師器・珠洲系陶器片・石臼片が出土した。中世土師器には外底部の大きい割に立ち上りの少ないもの、杯（盃）状のものなどがあるが、層序からみて土師器は古相に属すると考えられる。さらにこの西方の土壘裾の部分からも中世土師器が出土した。

石臼は粗雑な輝石安山岩（箱山産と類似）を加工したやや小型のもので、黒く焦げている。



35← 北面東内側
(90-18)の調
査地点



36→ 同中央部の
石積みと炭灰
層



37← 同炭灰層と
夜間瀬川乱流
の土砂堆積層

この下から中
世土師器・珠洲
系陶器片・石臼
など出土する

北面土壘東内側の調査 (90-20)

土壘内側から内部の石積み面まで、長さ4.5mについて調査した。西側部分の前面には、階段上に石が詰まっていた。この石積みの根石は、堆積土の上を東方に高さを増していた。土壘上は、後世に積まれた石礫で約0.4mほど被覆され、その中には中世から、現代に至るまでの陶磁器の破片が含まれていた。

石積みの手前に土壘上から崩落した石礫がみられ、底辺で約2.5m、三角状の規模に堆積していた。



38← 北面東側土壘(90-20)の石積み

39→ 北面土壘中央部(90-21)の石積み



北面土壘中央の調査 (90-21)

土壘の長さ2.5mについて内部の石積み面まで調査した。石積み手前に崩落した石礫は底辺で2.5mあり、現土壘を覆っていた。この中には、今までの調査地点と同様に積石大の石も混在していた。この石積みの高さは1.1m程である。

この石積みの根石の前方に珠州系陶器片が10数片散在し、炭片も顕著にみられた。さらに焼米片もあり、厨房関係の建物が近くにあったことも考えられる。

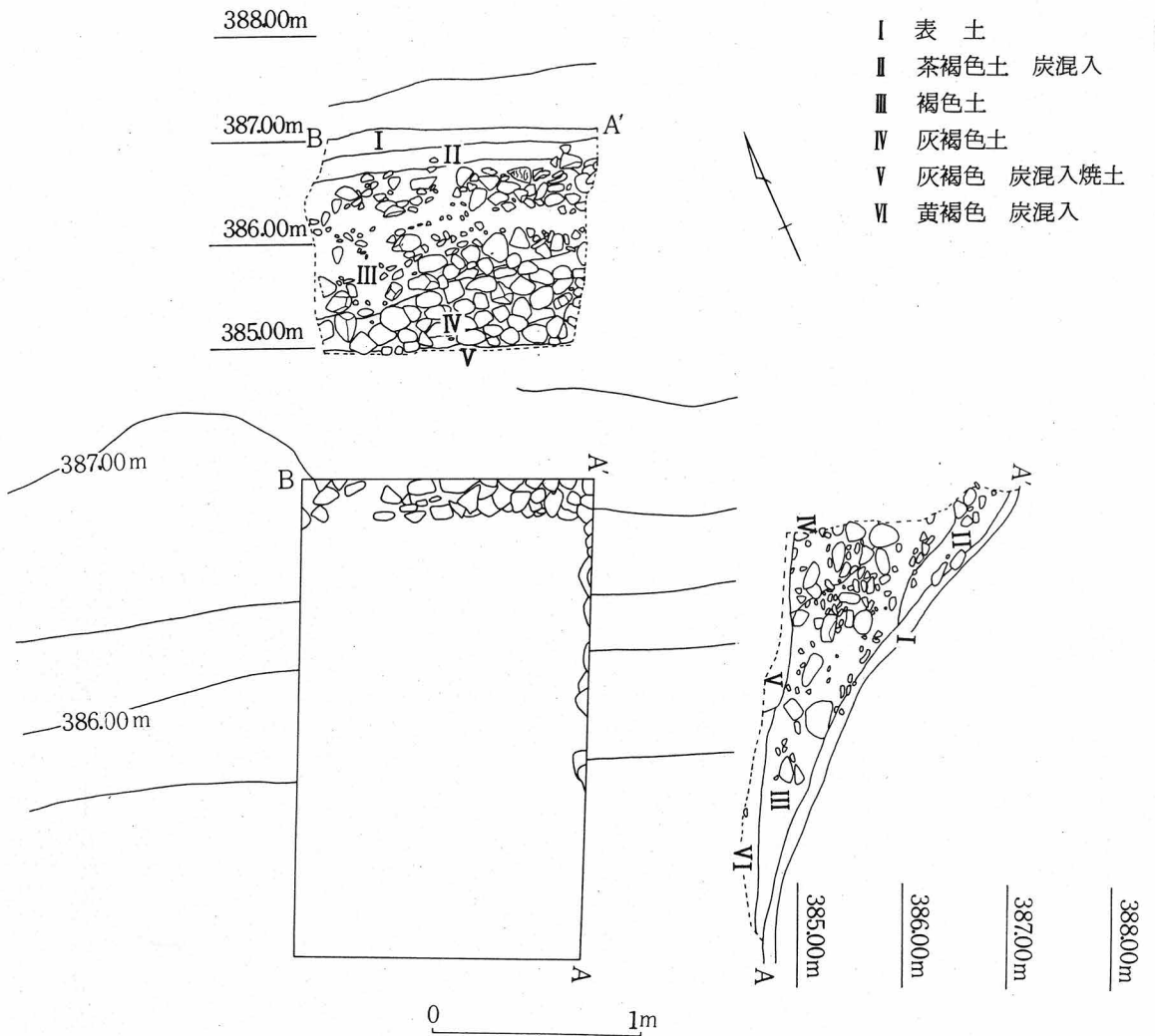


図12 北面土壘中央部(90-21)の調査全体図



40 ↑ 同中央部(90-21)
出土の珠洲系陶器

北面土塁西側の調査
(90-22)

北面の西方は他地点の土塁と比較して基底幅(敷)が広く、何らかの遺構があった可能性がある。

ここの土塁の調査幅は2.5mで、現土塁裾から奥へ約3m入ったところに根石があった。土塁の内側の平面から根石までの高さは1.5mである。この石積みはほとんど崩落して根石だけを残していた。西側に残っていた石積みの高さは0.6mである。



41 ↑ 同西側(90-22)の石積み

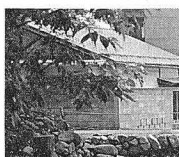
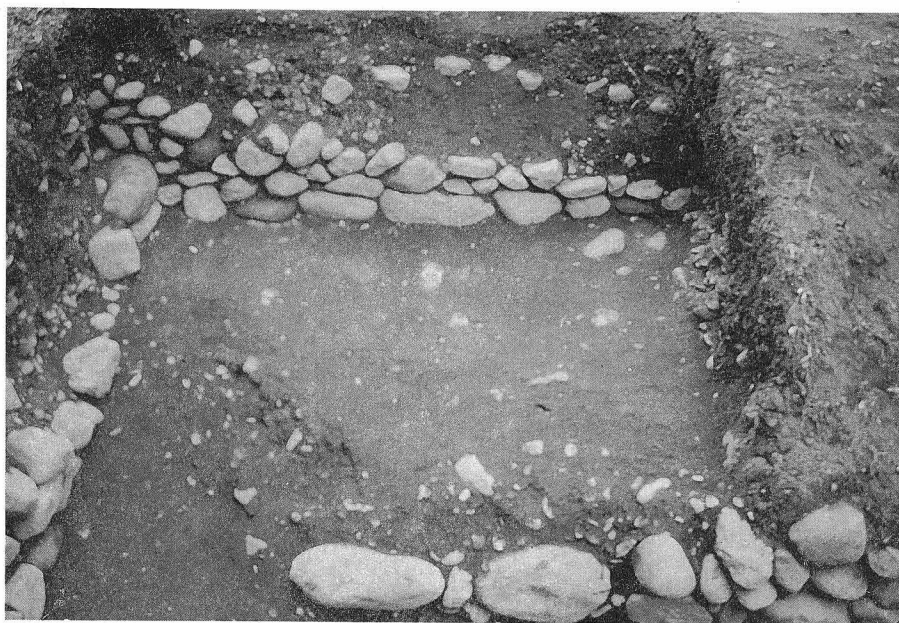
北面土塁西側の調査 (90-23)

ここは、北西の隅櫓のあったと思われる土壇状の遺構の東側に位置し、土塁の調査幅は約3mである。

この土塁の裾にも、中世に属するとみられる石積みがあるが、ここから約2m奥にも石積みがある。土塁の底面から根石までの高さは0.85mあり、西方が高くなっているが、高さは0.65mである。

この石積みから西側に直交して、さらに石積みが続いている。ここも残存状態は良くないが、良好なところでは高さ0.7mある。この石積みは南側でL角に屈折し、西北入口の北側石積みに連続している。

42→ 同西側(90-23)の石積み



43← 同西側石
積みと西北
入口

西面土橋南側堀の調査 (90-26)

平成元年(1989)には土橋南北の堀を調査したが、降雪期となったり、他の発掘調査の日程と重なって、近代以降の層を除去した時点で中止した。その時の面は積石大の石などで埋っており、したがって土橋南側の石積み下部は約半分埋った状態にあった。

この石積みを見ると2段に構成され、上段の石積みの天端の長さ7.5m、天端からの深さ0.9mの位置に、上段の石積みの根石があった。根石は比較的大きく、0.6×0.5mの石を最大とし、長径0.5mの石が多い。この石積みは「落し積み」(谷積み)に類似した手法で積まれており、近世以降の築造、または積み直しと考えられる。下段の石積みは約0.3m突出しているが、上幅は3.5m、高さは1.45mの規模である。

下段の石積みは「布積みくずし」の手法で、東面入口土橋南側(調査地点90-16)の石積みと類似する点が注目される。堀は、この石積みの下部でテラスを作ってさらに傾斜して深く、そこから-3.6mで堀底に達する。

この地点の調査幅は空堀南側に向って約5mであるが、先に記した近世の石礫層を掘りこんだところ、北枕・屈葬の人骨が1体検出された。層位などから明治以降の埋葬と推定される。

この石礫層を除去すると、中世層から中世土師器片などが検出された。

この調査地点は、前年までここに物置小屋があったため、諸々の廃棄物で埋っており、その厚さは約1.8mあった。この下が礫の少ない堆積層となる。以下7層に分けられるが、鉄分の多い土層もあり、縞状に堆積している。

この堀の断面はV字形を呈し、底辺から約0.5cm埋没したところで西側に石積み張り出している。これは長径0.65m、短径0.35mの石を最大とする、約2m規模の石積みである。この性格については、調査地外なので不明としておきたい。ただし旧道がここから鈴泉寺方面に通じている。

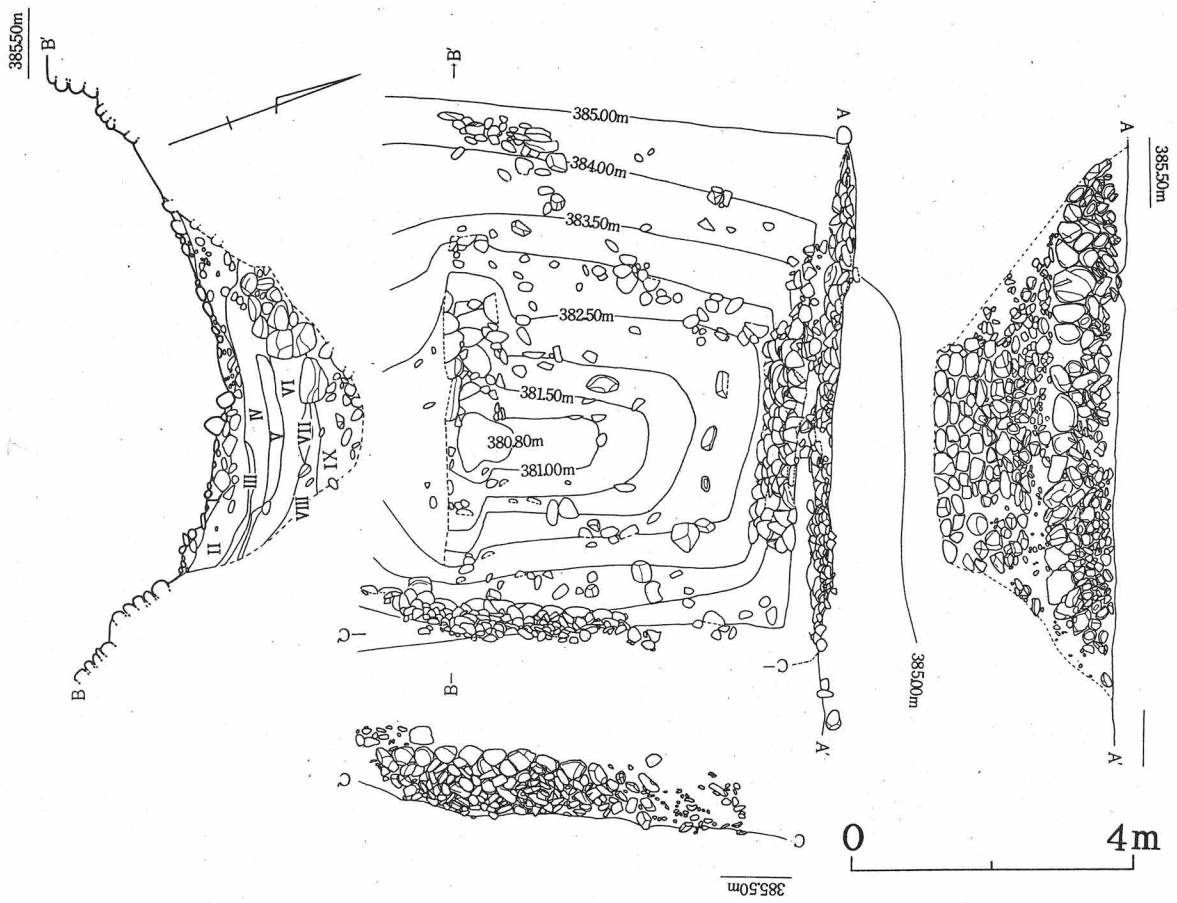
この堀底から現土塁上まで6.3mの落差があり、堀幅は約9m、東の土塁の基底幅(敷)は約9.5mである。



44↑ 西側北入口と土橋南側の石積み
(90-26)中段以下が中世の石積み



45↑ 同(90-26)堀南側断面
右側の埋没した箇所石積みが
ある。左側の石積みは後世のもの



- I 黒腐黄土
- II 赤粘土
- III 黒腐葉土
- IV 明灰色土 砂混り土
- V 灰茶褐色土 砂粘(砂混鉄分含む)
- VI 薄灰黒色土
- VII 灰茶褐色砂粘
- VIII 薄灰茶褐色土粘質土
- IX 黒褐色土 中小礫含む 微粘砂

図13 西面北入口南側の堀調査全体図

西面土橋北側の調査 (90-25)

ここも平成元年の調査では、現代層を取り除き、やや中世層に達した時点で終了したが、南側ほどは廃棄物が捨てられていなかった。土橋のそばには、積石大の石が多く埋没していた。

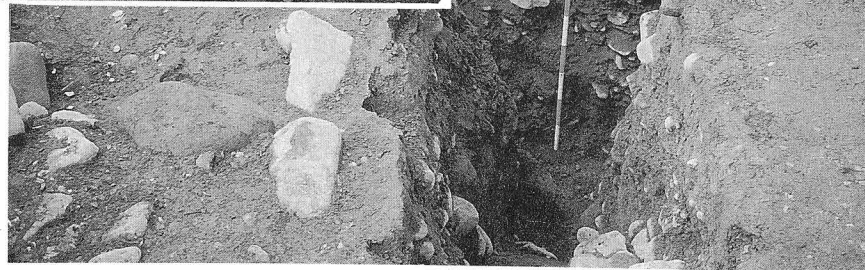
堀の埋没層は2.5m余に達し、近世末期から中世にかけての6層に識別できた。北壁面では長径0.3m程の石がみられるほか、埋没土層の中から中世土師器が出土した。堀底から1.5m上に幅1m以内の黄褐色の粘土層があり、土橋側に傾斜していた。これは南面の堀(89-02、90-03)で検出されたものと同質である。

堀の断面はV字形で、堀底から西側道路上まで4.4m、東の土塁上(隅の最高所から-0.72mの位置)まで6.8mである。道路面までの堀幅は7.8mであるが、道路側は新しい石積みになっており、旧状では9m位あったと考えられる。

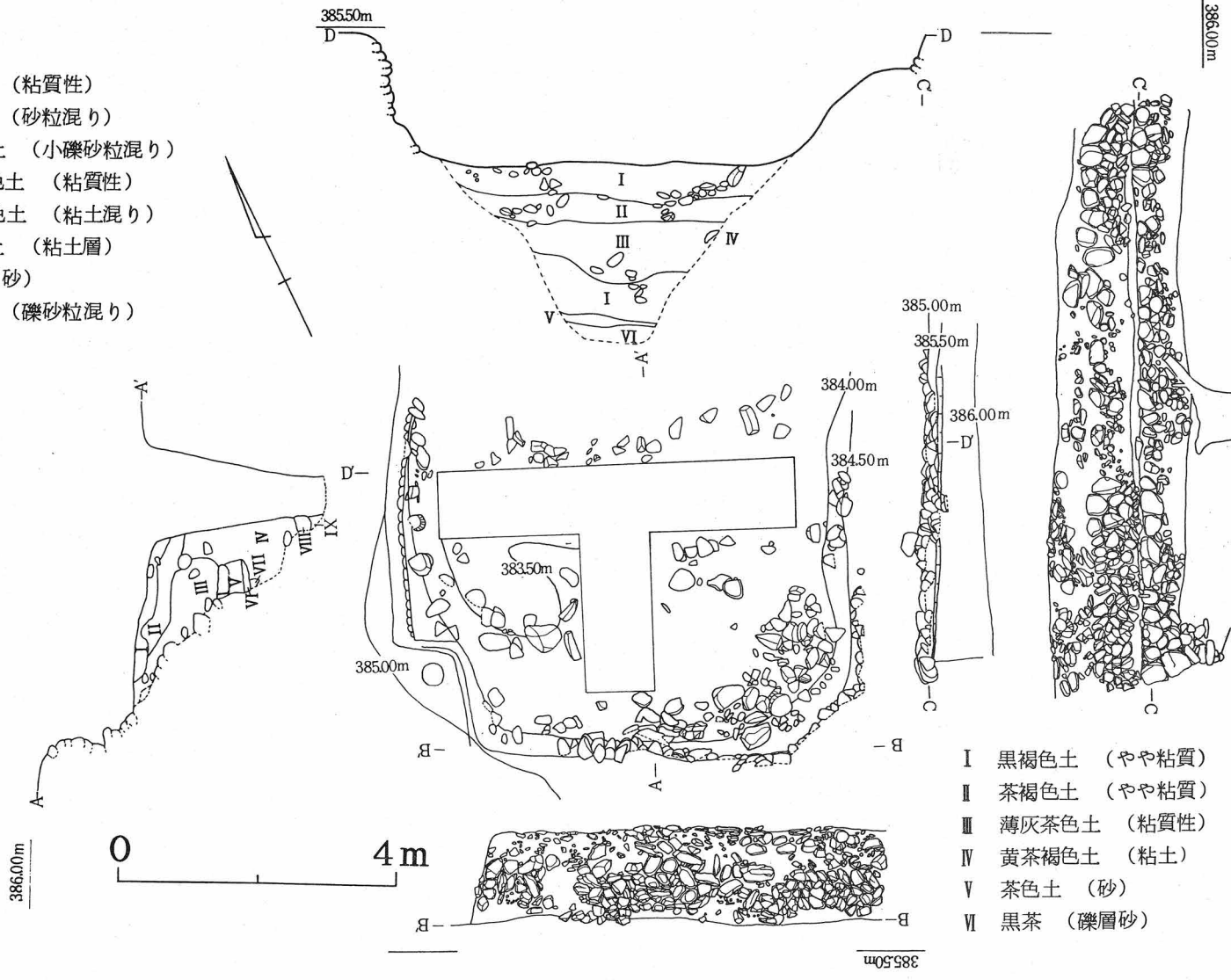


46← 同土橋北側の堀(90-25)
北から見た土橋

47↓ 同北側断面



- I 黒褐色土
- II 茶褐色土 (粘質性)
- III 黒褐色土 (砂粒混り)
- IV 薄茶褐色土 (小礫砂粒混り)
- V 薄い黒褐色土 (粘質性)
- VI 薄黄茶褐色土 (粘土混り)
- VII 黄茶褐色土 (粘土層)
- VIII 茶色土 (砂)
- IX 黒茶色土 (礫砂粒混り)



- I 黒褐色土 (やや粘質)
- II 茶褐色土 (やや粘質)
- III 薄灰茶色土 (粘質性)
- IV 黄茶褐色土 (粘土)
- V 茶色土 (砂)
- VI 黒茶 (礫層砂)

図14 西面北入口土橋北側の調査全体図

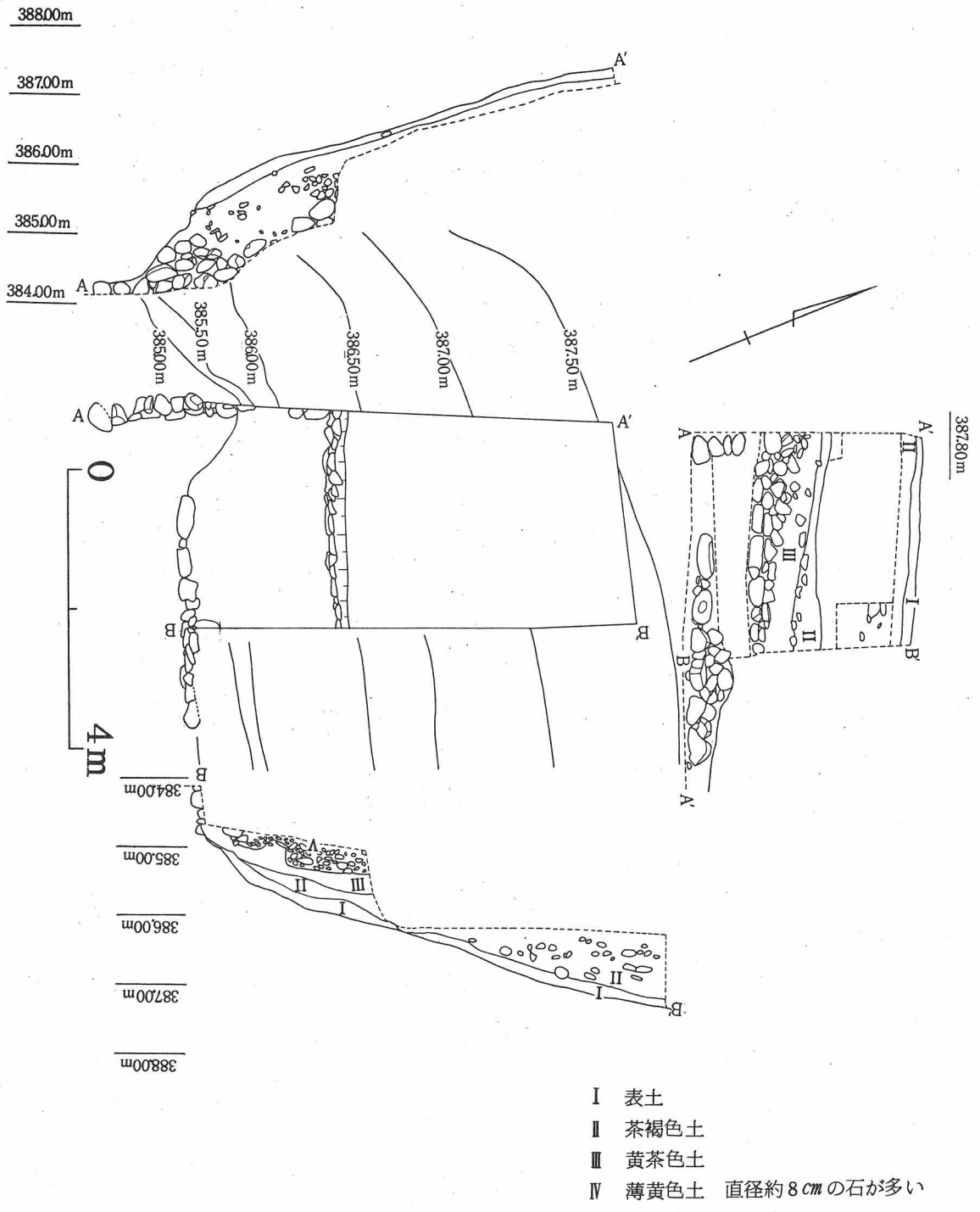


図15 北面土塁西側の調査全体図

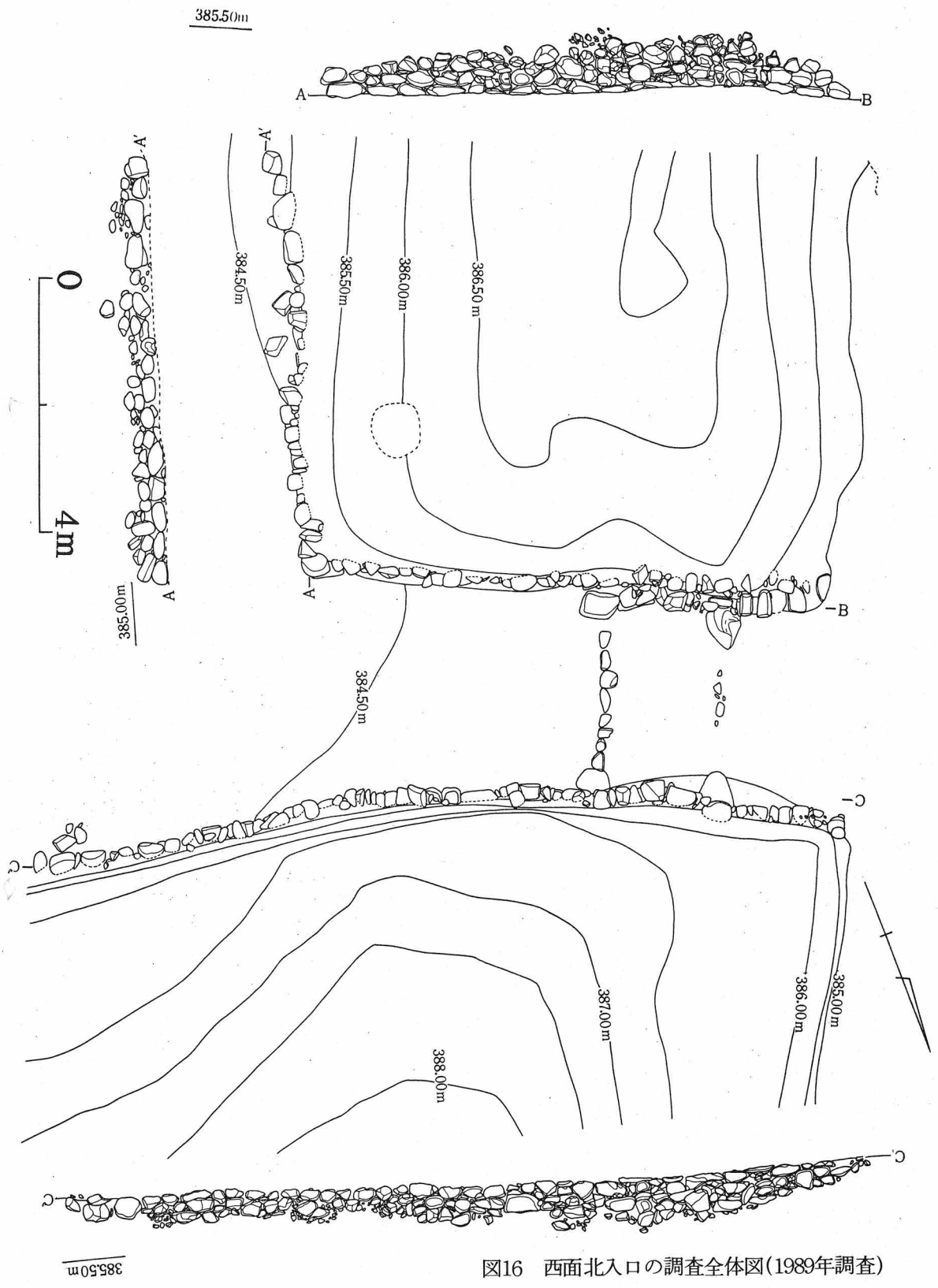


図16 西面北入口の調査全体図(1989年調査)

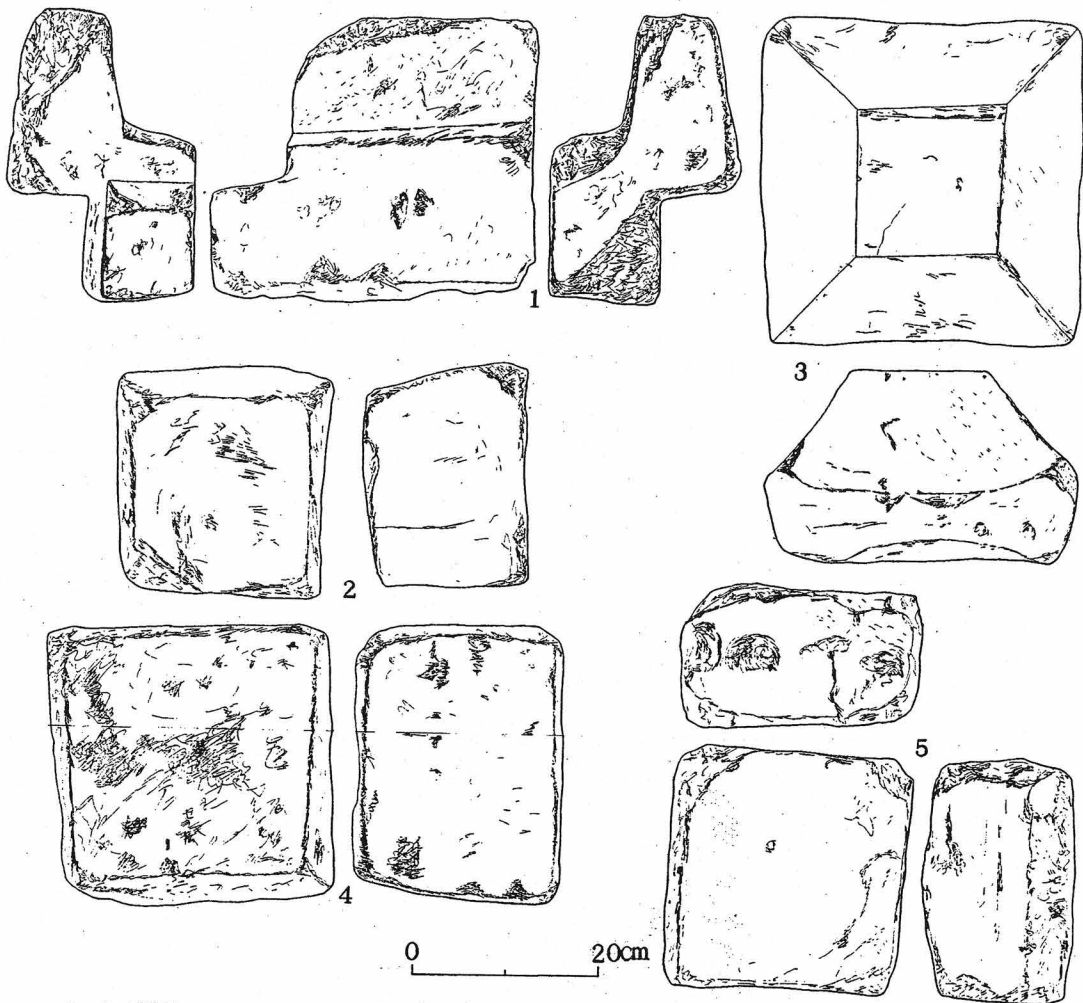


図17 石製品実測図(90-02出土)

- 1 加工石製品
南東入口出土
- 2 五輪塔 地輪
南東入口出土
- 3 五輪塔
南東入口出土
- 4 五輪塔 地輪
粗耗 安山岩
南東入口出土
- 5 五輪塔 台石
南東入口出土

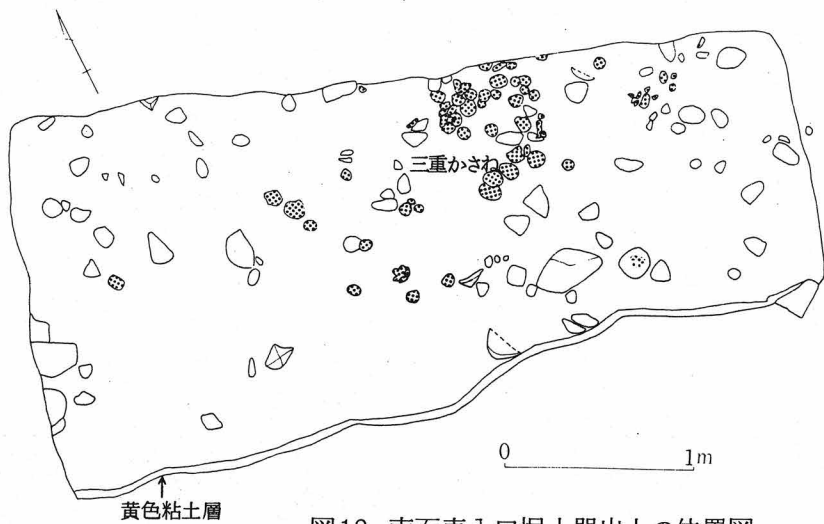


図18 南面東入口掘土器出土の位置図

主な出土遺物の調査概要

中世土師器

高梨館では、日常雑器類としては中世土師器の出土率がきわめて高い。館内のどの地点でも出土率に差異こそあるものの、破片は必ず出土している。したがってこの館は、ある程度長期にわたり領主層が住んでいた生活遺跡と考えられる。

これら土師器の製作技法からみて製作時期がわかれば、高梨館の存続時期はもとより、それ以前の遺構の時期も究明できるものと期待される。

高梨館の中世の実態を知るには、中世土師器の編年作業は言うに及ばず、集中出土地点からは中世の信仰・日常生活全般にかかわる問題が考えられるので、遺物のあり方からの追究も必要である。

全国的には、中世土師器の編年は太宰府・京都・大阪・鎌倉など中世の政治の中心地や、貿易陶磁の出土の多い地域で編年が進んでいる。また能登半島穴水町のように中世の村落が発掘されている所や、広島県福山市草戸千軒遺跡のように長年継続して発掘調査が行われている地域では、詳細な編年が確立しつつある。長野県では、陶磁器に比較して使用年数が短いとみられる中世土師器については、年々出土報告が増加しているが、地域の編年案はいまだなされていない現状である。この基礎作業として、遺構ごとの伴出遺物と出土層位の検討によって編年を組み立てねばならないが、高梨館の遺構出土例のみでは、やや客観性に欠ける心配がある。

このように、この地域の中世土師器の編年は、高梨館に期待されることが大きく、試案も固まりつつあるが、今回は遺構ごとの出土例を提示して、若干の考察を述べるにとどめ、調査終了後の報告書において、編年案を提示したい。

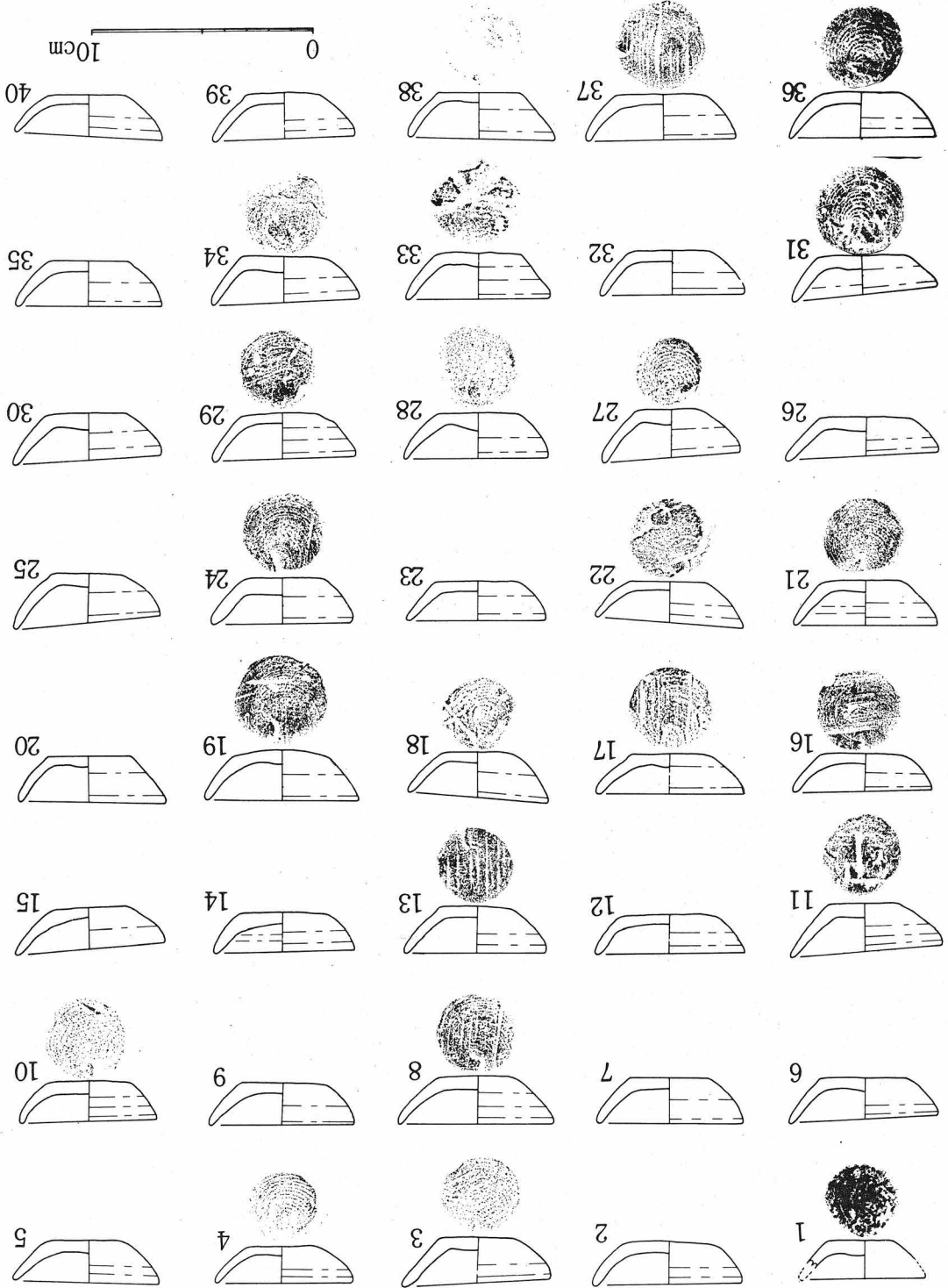
南東入口の堀(90-03)から出土した中世土師器(19・20図1~59)は、大小の2群に分類され、大形品(径10~11cm)は色調が白黄色から黄橙色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。

器形はわずかに内湾して立ちあがり、口縁端部が軽くナデられ、丸くなっている。見込みは中央がやや高くなっているものが多く、器厚は比較的厚い。外底部にはすべて糸切り痕がみられ、中央附近に細い板状の圧痕がある。

小形品(径5~6cm)も、胎土・成形・焼成の性格は同じで、器厚に薄手のものがみられるが、これらは同時期の製作と認められる。この一群も編年の指標となるだろう。なかには2次加熱痕のみられるものもあるが、油煙などの附着したものはなく、重なった状態で検出されたことから、祭祀に使用された可能性が高い。

中世土師器の21図の2~7・9は、東入口内部(90-09)の4層~6層にかけて出土するが、図示以外にも多数の破片が出土する。器形には大・中・小があるが、比較的底部が大きく、立ちあがりの少ないものが多い。

图19 中世土師器美測圖(90-03出土)



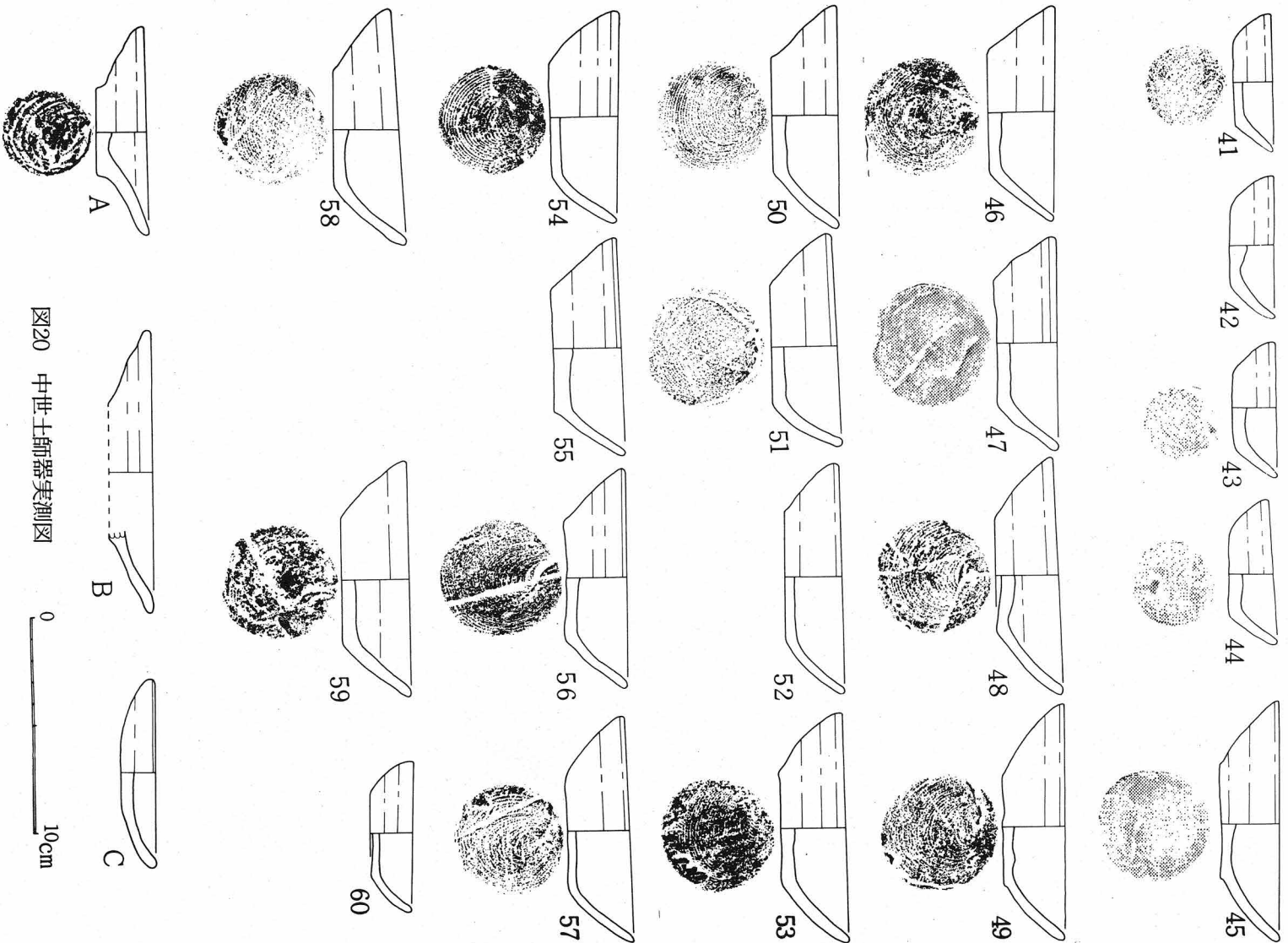


图20 中世土師器実測図

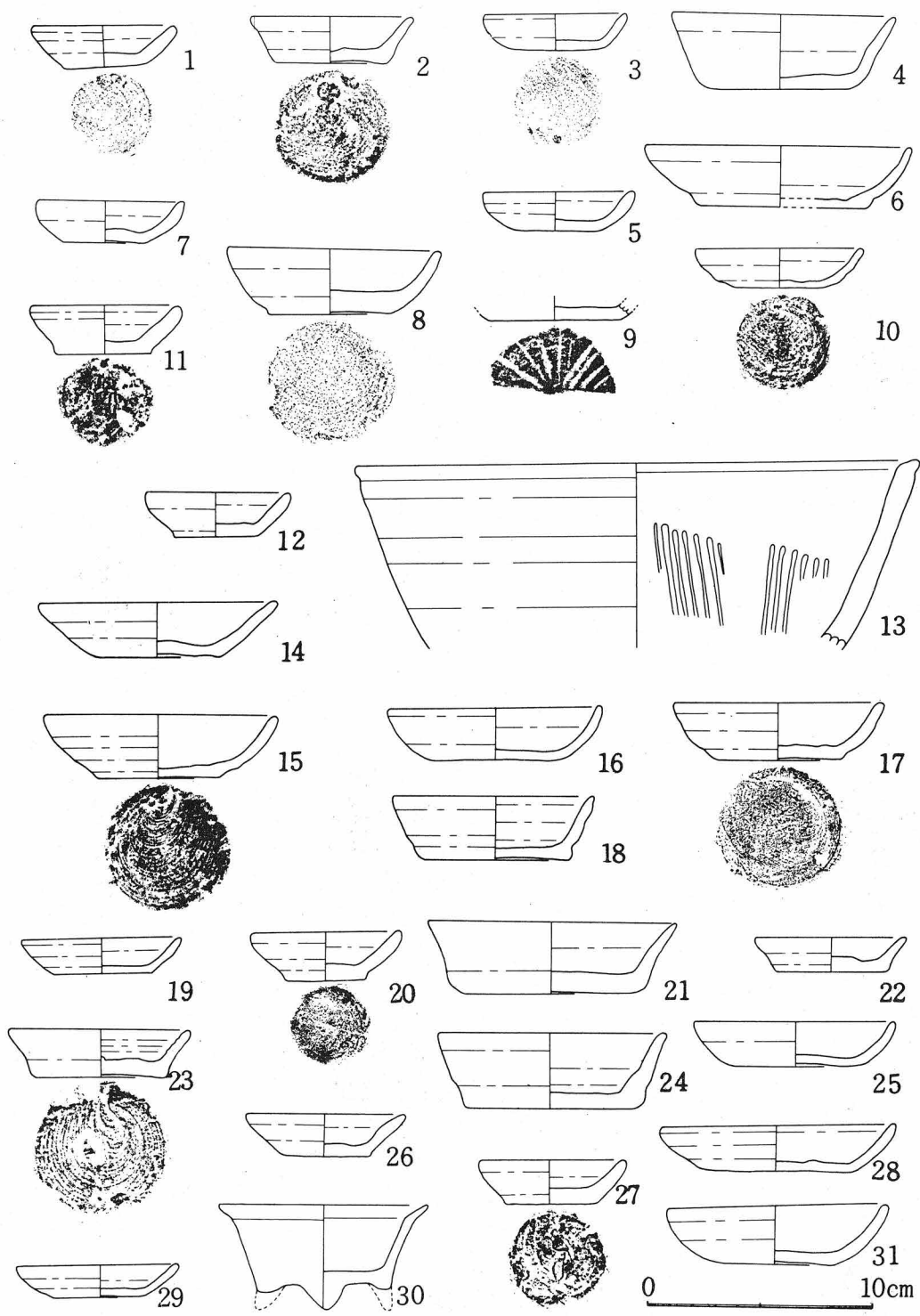


図21 中世土師器・珠洲系陶器の実測図

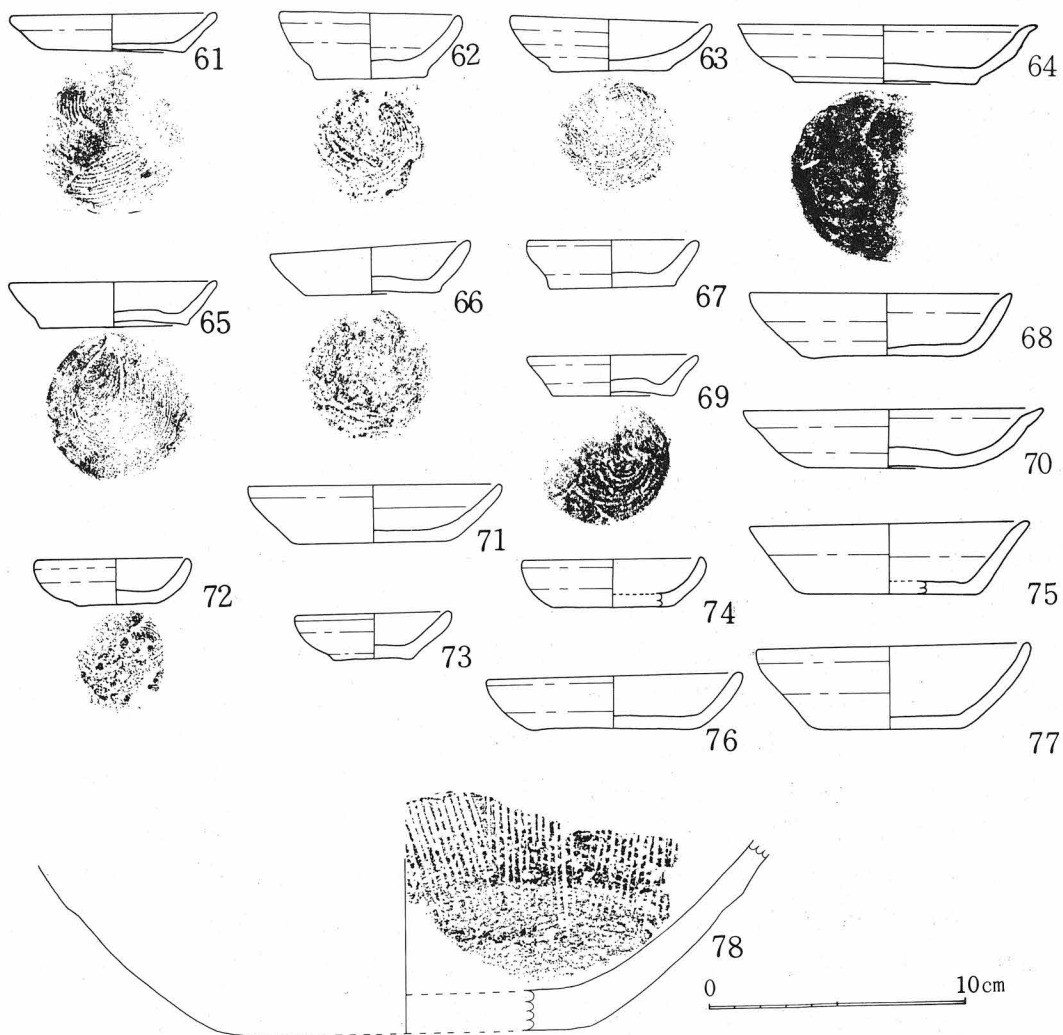
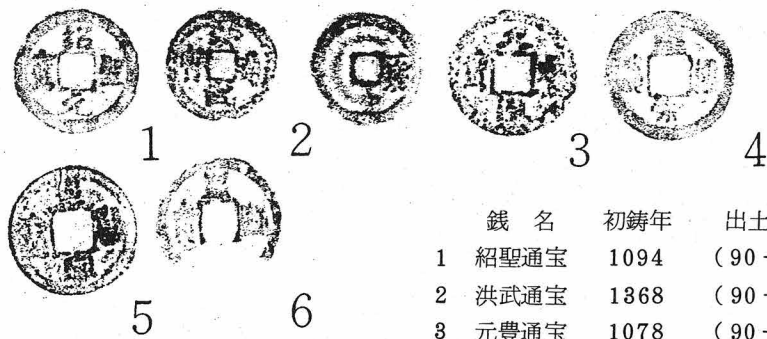


图22 中世土師器、珠洲系陶器実測図各地点出土



0 2cm

錢名	初鑄年	出土地点
1 紹聖通寶	1094	(90-15)
2 洪武通寶	1368	(90-19)
3 元豐通寶	1078	(90-15)
4 皇宋通寶	1039	(")
5 熙寧元寶	"	(")
6 " "	"	(")

图23 古錢拓影図

9は、焼成後、外底部に放射状に線刻された土師器の破片であるが、これは福井県一乗谷朝倉氏遺跡その他において鎮壇具に用いられたものと同様に考えられる。

10は、稲荷社南東の土塁際（90-06）から出土したもので、胎土が精選されており、成形痕も顕著である。

14～18は、東入口南側堀底（90-10）から出土したもので、中形品に属する。14のように見込（内部の底）の盛り上がるものと、15・16のように内湾して立ち上がるもの、17のように外底部の少し突出するもの、18のように底部の上に凹みがあり、外傾の立ち上がりが直線状のものなどがある。

これら直線状のものは21・24の器形と同じで、21は同所北堀、24は東面北調査地（90-12）から出土したもので、これと同形の小型品22・23も同所から出土している。これらは胎土に砂粒を含み、底部の割に立ち上がりの少ない器形で、見込みが盛り上がっている。23には、右まわりのロクロ整形痕がみられる。

20は同所北堀（90-11）の出土、26は東北堀（90-13）の出土で、器形が似ている。21図ではそのほか1・2・3・5・7・11・27が同形である。

さきの10と19は同所北堀（90-11）、29は東面北側土塁内（90-12）から出土したもので、器形も類似し、薄手作りで、胎土も精選されており、性格は同じである。

30は、3脚を持った、口縁部が端反りする器形で、胎土に砂粒のみられない白土器に属する色調であるが、一部にわずか黒色の部分がみられる。

これと似た例は、石川県穴水町小館遺跡^{おだち}から2点出土している。ここは遺跡名の示すように、中世館が存在したと伝えられる所である。この火舎（香炉）には印花文などがみられ、胎土は精良で黒色処理されたものと、そうでないものがある。伊野近富は「12～16世紀の京都の土器」（1989）において、同形品に16世紀初頭の位置づけを行っている。

白土器（白かわらけ）については、百瀬正恒が「京都の土師器生産と搬入土師器」（1986）において「13世紀中葉に白い胎土の杯形土器（白土器）が成立し、14世紀になると杯・縁折小皿・ヘソ皿・高杯のセットが成立し、室町時代を代表する土師器となる」とされ、京都周辺では和歌山県根来寺で白土器が発見されるという。村田弘氏によると、「根来寺の白土器は14世紀後葉から出土し始め、15世紀前葉から中葉にかけては、土師器杯、皿の出土量の全体にたいし80%を占めるようになり、15世紀末で出土量が減り終えんする。底部には糸切り痕がある。胎土は京都のものより純白で、根来寺周辺で生産したものと推定されるとして、この時期の土師器が堺や京都周辺の丹後などに多く出土するのも、同一文化現象として理解できる」とされている。

高梨館では、中世土師器の各集中出土地点で、この白土器（白かわらけ）に似たものが量的には5%以下の状態で検出されるが、各調査年度別の集計・復元作業は完了していない。それゆえ、遺構にかかわる出土地点の種別・土器構成などの把握につとめ、京都・奈良方面で

15世紀末から16世紀前半に白土器・赤土器の区別がなくなるとされる画期が、この地方においても適応されるかどうか検証する必要があるだろう。

22図の61・65・67・69は、北面土壘東内側（90-18）の現状土壘構築前の地層から検出されたもので、色調は赤褐色を呈し、胎土には少量の砂の混入がみられる。底部が大きい割には立ち上がりは少なく、わずかに外反りしている。

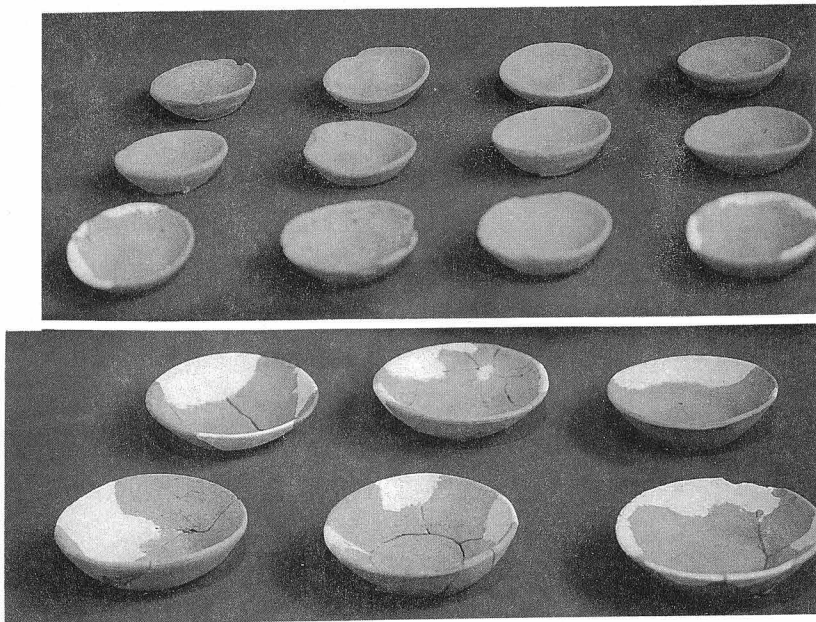
高梨館の土師器の糸切り痕を観察するといろいろとあるが、同じ系譜の土器といえる。時期差が製作者の個人差かの問題は今後に残される。

22図の62は、同所炭灰層から出土したもので、色調は灰黒色を呈している。口縁の外器壁は内湾し、内壁はほぼ直線に外反して口縁端部をつくっている。見込みはやや盛り上がり、内外面は横ナデされている。外底部は突出したところで糸切されている。これは、図72と類似した器形であるが、72は上層から出土しているので、この方が層序からみて古い様相を示めすものと考えられる。

22図の64・68・70・71・75・76は、径10～12cmの大形の部類の皿で、77は碗状を呈している。64と70は器形が口縁端反りした胎土の精良なものである。68・71などは口縁端部が尖っているが、他に口縁端部が丸い傾向のものもみられる。

また、21図の60は、南土壘の築地を確認するための試掘坑から出土したもので、土壘構築土の最終盛土の砂礫層に埋もれていたものである。館の現状土壘の構築期に使用された可能性が大きい。

このように、各遺構の土の層序から遺物の絶対年代を追究することによって、遺構の前後関係を把握し、文書資料を補完して中世の時代を復元していくことが残された課題となるう。



48← 中世土師器
南側東入口の堀
(90-03) から
出土

石 積 み

館は夜間瀬川扇状地の右端近くにあるので、山ノ内町と行政境界をなす山から派生した尾根によって、夜間瀬川の水害を避けやすくしている。

館を構成する地質は、砂礫層と比較的良好な土砂の堆積とからなっているが、これは、扇状地を形成した乱流部の中辺に位置するためと考えられる。享保15(1730)年・同19(1734)年・寛保2(1742)年にも、松川方面(現市街地の上方)が水害に遭った記録があるほどである。

明治9(1876)年の地籍図には、館周辺に石積み(ヤックラその他)が沢山画かれているがのちに耕地化するために取り除かれた。

このようにこの館では、河川によってつくられた玉石が容易に得られることから、これが石積みのほとんどに使用されている。たまに石臼の破片、五輪塔の部材や山石が使用されているが、これは鴨ヶ嶽城周辺の山の石で、白色粗耗な輝石安山岩と黒色緻密な安山岩に分けられる。前者は箱山を構成する岩石で、後者は普代から更科北部を構成する岩石である。

館の土塁内側に石積みを確認されないのは、庭園南側の造園に伴って拡張されたと思われる土塁部分のみである。東面・南面西側と西側は土塁の下部が石積み、北面は土塁の中段が石積みで覆われている。

昭和62年(1987)の調査では、南面西側の土塁内側裾の石積みは、他地点よりも多く大形の山石を玉石に混ぜて使用されていたことがわかった。

しかしこの館の石積みの素材は、野石(川原石)の玉石使用が特色とされる。比較的保存状態の良い西面北入口の石積みをみると、布積みくずしの手法を用いている。面径は0.3~0.5mのものが多く使用され、面は加工せず、比較的控のある石を用いている。北面土塁東の土塁切断調査によれば、裏込め石は見出せず空積みである。

館内の中世とみられる石積みは、ほとんど勾配が認められず、尻上りとなって崩落寸前のものが多い。また東面土塁内側には積み直しと認められる箇所がある。

この館の石積みについて指導された北垣総一郎は、「この石積みについては、成立時期を推定する要素としての隅角部の残存度が悪く、検討材料に乏しい。もっとも、石積み技法の先進地域である近江周辺部では、少なくとも1540年代には裏込め石を有する石積みとして完成する。しかし、例えば現在(1991-1)発掘調査中の中道子山城では、裏込め石を原則的に持たない隅角部や石塁状石積みが検出され、それは1530年代と確定できる。裏込め石を持たない(I西面北入口両側、II北面・中央、III北東内角)の石積みから観察して、それは16世紀中葉と考えられるのではあるまいか」と、されている。

指摘された16世紀中葉とは高梨政頼の時代であり、天文22(1553)年には川中島で甲越の両軍がはじめて衝突をし、こののちまもなく高梨氏は高梨館を退去したと推定されている。

高梨氏がふたたび中野の館を入手するのは、30数年後の天正18（1590）年のことであった。

とすれば、保存状態がきわめて良好な西面北入口には、控え柱のある四脚門（薬医門・高麗門・櫓門かいつれか）の礎石がみられる。また鏝・炭片（ケヤキ類ほか）や一部大壁かと思われる壁土の焼けたものも出土したり、礎石部分の積み石が火熱で剥落していることは、落城の時期と遺構の年代推定に示唆を与えることになる。

館の詰城である鴨ヶ嶽城にも、石塁が存在する。南方の第3郭の南側には幅10m余、長さ30数m、深さ10m余の大堀切があり、堀底は石礫で埋っている。この堀切の北側上部にL字形の石積みがあり、長さ約30mにわたるが、その西側にも50mにわたってみられる。この石積みと館にみられる石積みとの比較・検討も、今後の課題である。

その他、館では西面北入口の南堀・南東土塁外角部・北東土塁外角部・現南面入口の土橋両側の野石積みなどは、落し積みの手法によって積まれている。この手法は新しいので、この部分の石積みは後世の構築・補修と考えられる。



49↑ 鴨ヶ嶽城第3郭の石積み

石臼

ここでいう石臼とは「手挽き回転式石製粉用具」のことである。別名「碾磑」ともいい、日本では鎌倉時代中期以後茶臼とともに使用されるようになった。

現在、高梨館では、石臼の破片は3点確認されている。1は、東面内側(90-13)の石積み
に転用されているもので下石とみられるが、詳細は不明である。2は、北面東堀側(90-17)
の土塁から出土したもので、これも下石で石質は均一な安山岩である。3は、北面東内側土塁
炭灰層下(90-18)から出土したもので、上石である。粗耗な安山岩を加工してあり、地元
箱山産と似ている。

上石の上面の物くぼりの穴と下面の溝面は黒色に焦げているが、破断面が焦げていないの
は、火熱後の破砕のためと考えられる。

臼の推定直径は約30cmで小型の部類に入る。厚さは約11cm、上面の縁が欠けているが、も
の入れの凹みの深さは約2cm、もの入れの穴の直径は4.2cmである。主溝・副溝の溝間の間隔
は、中心から中心まで2cmある。

臼は破片のため不明な点もあるが、関西系(関東・九州は六分角が多い)といわれる八分
角と推定される。中野市内では、八分角の石ウスは間山の建応寺跡などから出土している。

出土層位からみて、この石ウスは、戦国時代中期以前の16世紀初期のものとして推定される。
当時は一般に寺院・領主層の持物であり、庶民にはまだ普及していなかったといわれてい
る。

材質からみると、この石ウスは地元産の石を使用しているが、八分角という点からすると
近畿圏の系統のウス師(ウス職人)との関係が考えられる。類例の増加をまっの究明が望
まれる。

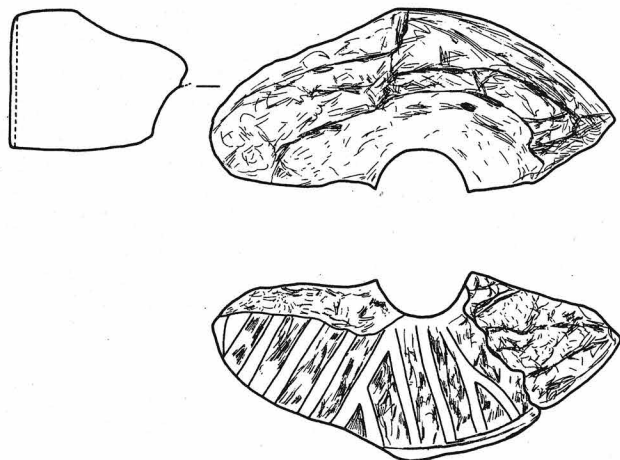


図24 石臼実測図

0 10cm

珠洲系陶器

北信地方の中世遺跡から出土する珠洲系陶器が注目されたのは、約20年前からであり、岡川勇夫「千曲川沿岸に於ける珠洲焼の分布」（「長野」66、1975）の報告が最初のものである。その後、長野県の南限は諏訪湖周辺まで及ぶことが確認され、東北信地方では城館跡の調査によって出土例が増加している。

中野市周辺では、間山の建応寺跡・新野の小曾崖城跡・西条岩船遺跡群・豊田村の替佐城跡からの出土が知られる。本報告の高梨館跡では、中世土師器について、珠洲系の破片類の出土が多い。鴨ヶ嶽城の七面山郭跡下でも、口縁が比較的大きく、稜をもった短頸の甕の破片が採集されている。豊野町鷲寺経塚出土の壺（『上水内郡誌』）は、13世紀末頃（鎌倉後期）の製品で、怒り肩の体部に綾杉状の叩打痕がある。

珠洲焼は須恵器の継承とされており、平安時代末に能登半島の先端地方において生産され始めた中世陶器である。

鎌倉幕府成立（12世紀末）の頃から珠洲窯は盛況期を迎えた。基本的な器種として壺・甕・播鉢が完成し、南北朝・室町・戦国時代までの500年間操業が続けられたようである。そして吉岡康暢などの精力的な研究によって珠洲系陶器の編年大系が確立している。

第Ⅰ期 12世紀中頃～13世紀初頭

第Ⅱ期 13世紀前半～中葉頃

第Ⅲ期 13世紀後半

第Ⅳ期 14世紀前半～後半

第Ⅴ期 15世紀前半

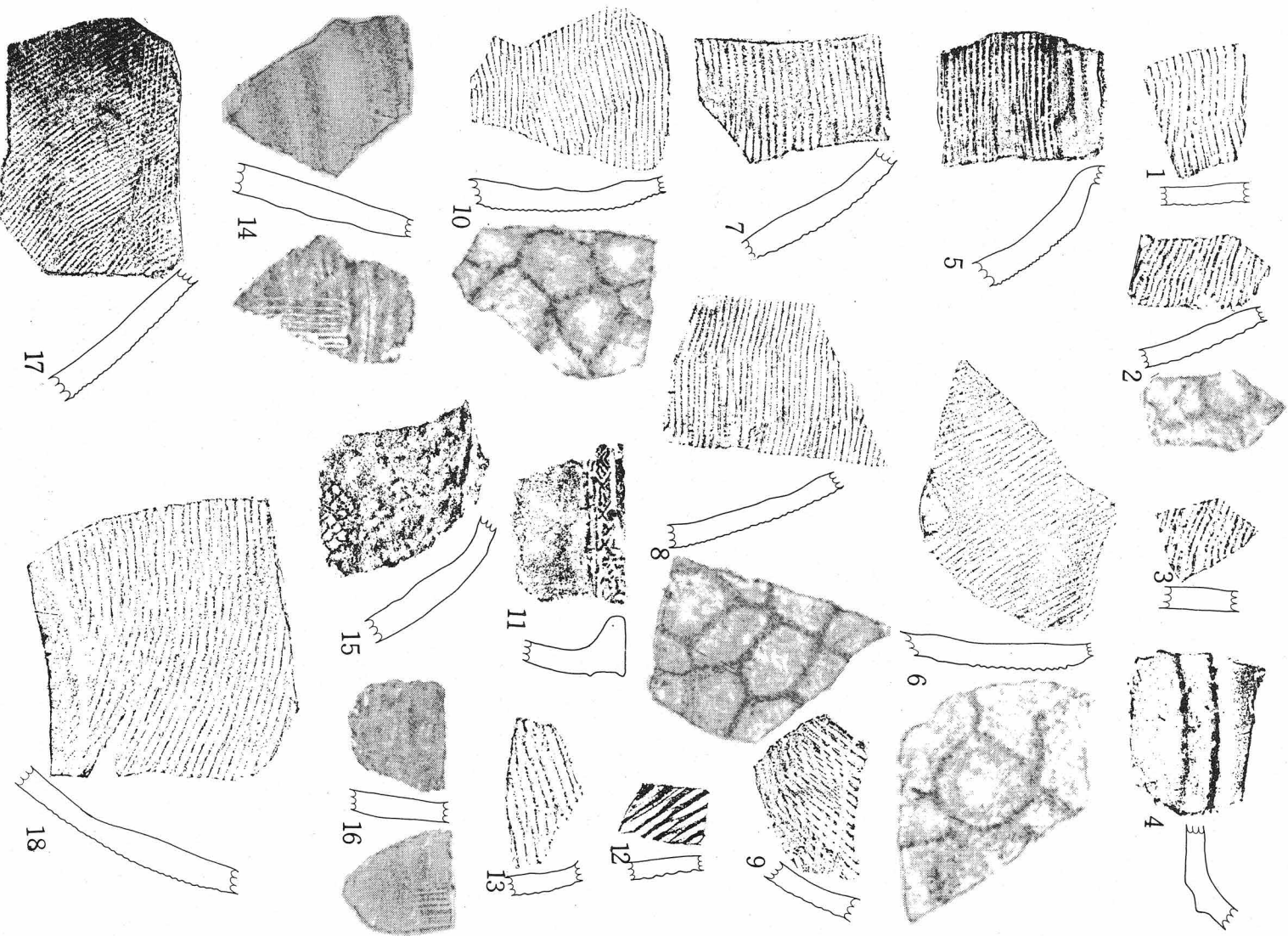
第Ⅵ期 15世紀後半

第Ⅶ期 16世紀前半

さらに将来は細分類も可能とされているが、当初の珠洲焼製品の供給範囲は、石川県手取川以北から富山湾沿岸の比較的狭い地域であった。第Ⅲ期は、岐阜県北部から北海道南部までの列島の4分の1の地域に及んだが、16世紀前半に越前陶器が優勢となり、これがこの地方に広く流通するに及び廃絶したとされている。

高梨館跡出土の珠洲系陶器は、能登半島からやや距離もあって、その窯跡の所在地は解明できない。そのため、こうした傍系統も含めて一般に珠洲焼系陶器（珠洲系陶器）と呼んでいる。吉岡も、「新潟県から東北一円において発見される中世陶器には、珠洲焼とはやや素地・釉調を異にする須恵器系第二類のものがあ、珠洲系そのものと区別される」としている。今後、本館跡出土の珠洲系陶器および中世陶磁の生産地の解明、流通過程の究明が課題となる。

高梨館における1990年度の調査地点出土の国産陶器・土器の概要については、25図～27図



0 10cm

图25 陶磁器·土器折影图(1)

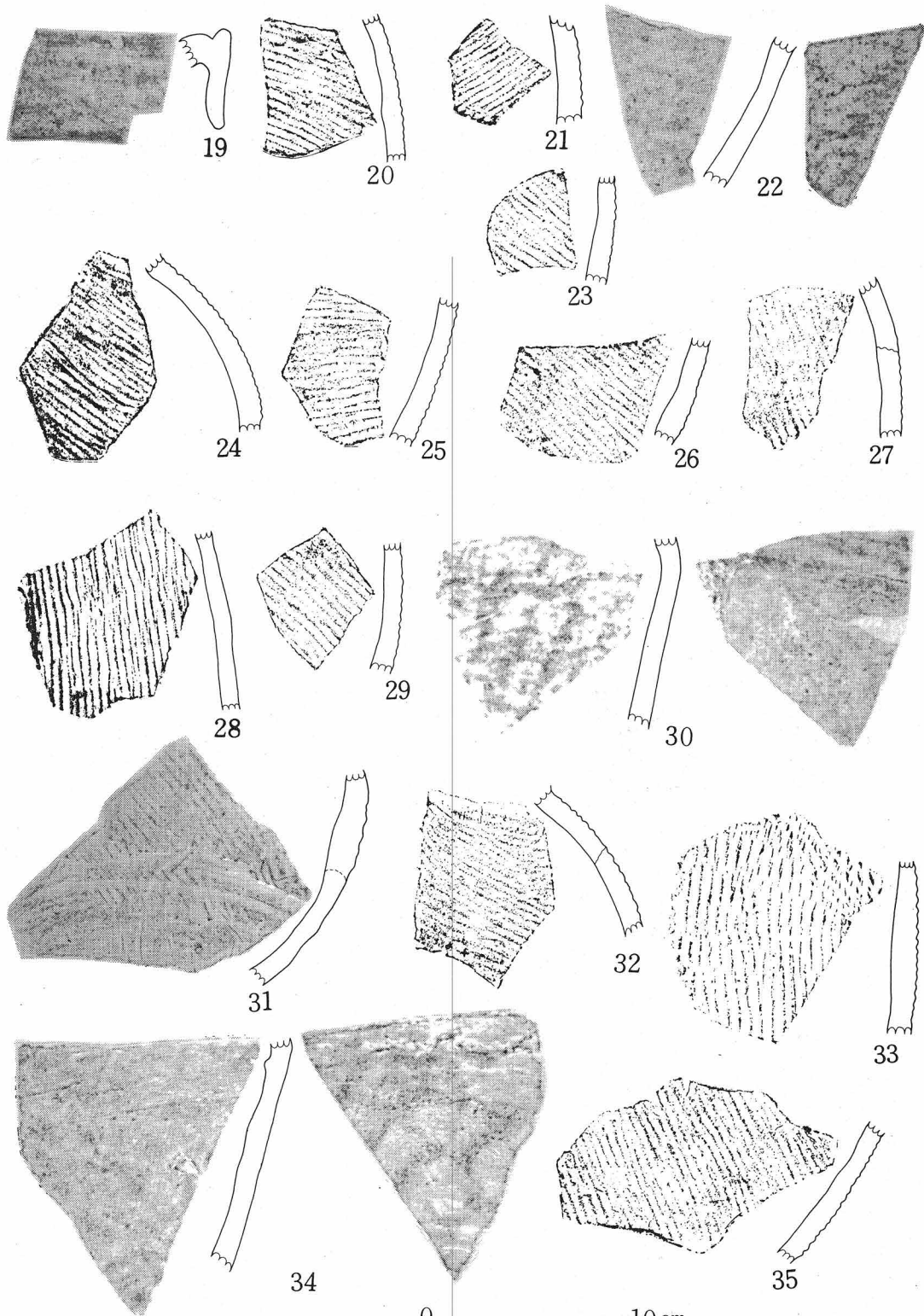


图26 陶磁器·土器拓影图(2)

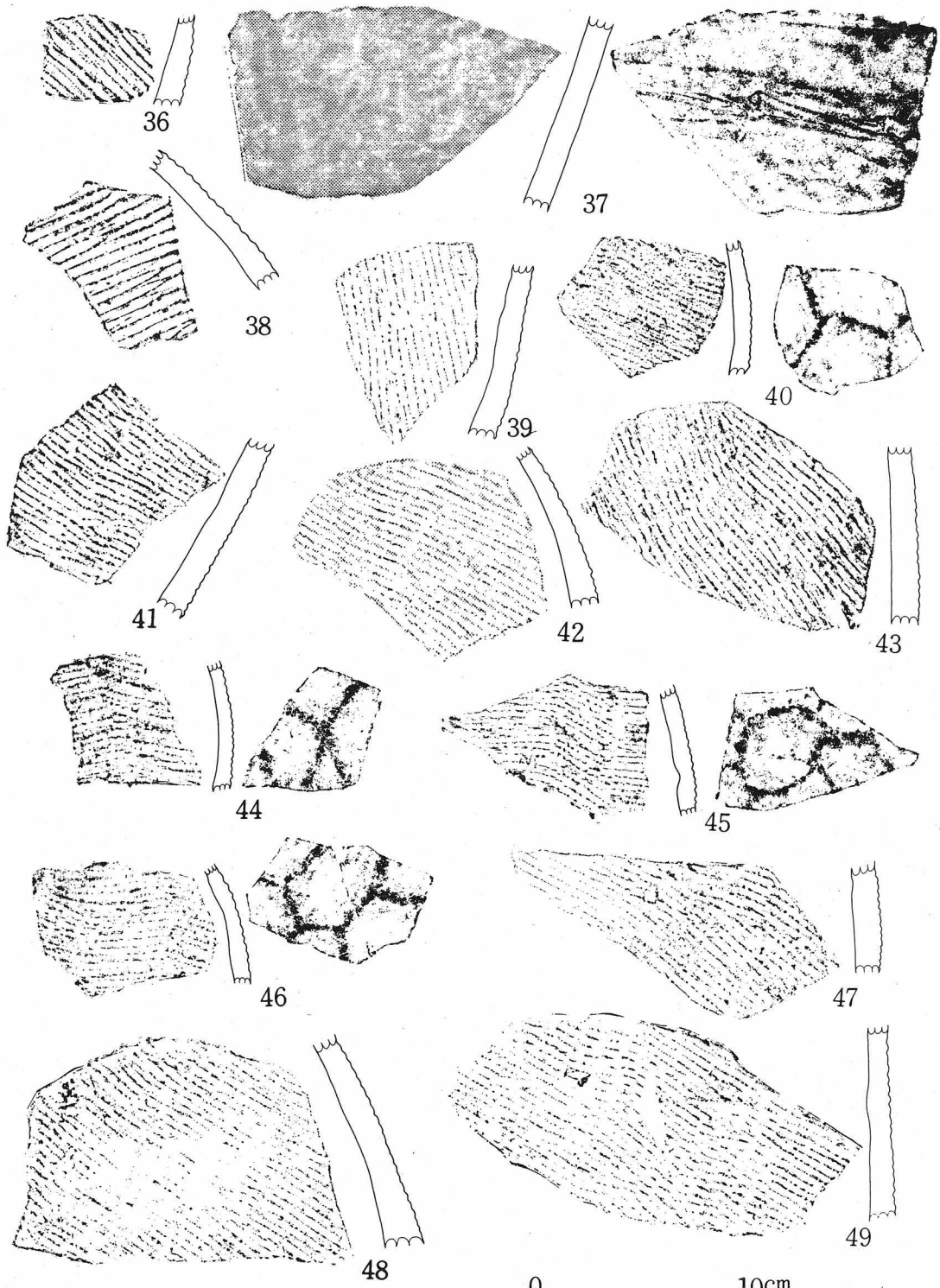


图27 陶磁器·土器拓影图(3)

陶器・土器の種別など

図番号	出土地点	種別	器種	色調	備考
25 図 1	庭園池北東	珠洲焼系	甕 胴 部	暗 灰 色	
" 2	"	"	"	"	
" 3	90 - 09 (東入口内 3 層)	"	"	"	鉄分附着
" 4	"	"	壺 底 部	"	突帯あり
" 5	"	"	" 肩 部	灰 白 色	
" 6	90 - 10 (掘底)	"	甕 "	暗 灰 色	
" 7	"	"	壺 "	"	煤附着
" 8	90 - 13	"	腰 部	"	
" 9	90 - 18 (炭灰下層)	"	壺 肩 部	"	綾杉状叩打痕
" 10	90 - 12 (土塁下層)	"	胴 部	"	
" 11	90 - 19 (表層)	瓦質土器	火鉢	黒 色	表採口縁花菱文
" 12	90 - 12 (土塁下層)	珠洲焼系	胴 部	暗 灰 色	
" 13	"	"	"	"	
" 14	90 - 17	"	擂鉢	青 灰 色	
" 15	90 - 18 (2層)	常滑系	甕 上半部	赤 褐 色	押印あり
" 16	90 - 16	珠洲焼系	擂鉢	灰 白 色	
" 17	90 - 13	"	肩 部	青 灰 色	表 採
" 18	90 - 19	"	下半部	暗 灰 色	煤附着
26 図 19	90 - 20 (表層)	常滑系	口 縁	暗 橙 色	折り返し口縁帯
" 20	"	珠洲焼系	胴 部	暗 灰 色	
" 21	90 - 15 (2層)	須恵器	甕 胴 部	青 灰 色	
" 22	90 - 20	常滑系	"	暗 橙 色	
" 23	"	珠洲焼系	"	暗 灰 色	
" 24	"	"	下半部	"	
" 25	"	"	"	"	
" 26	"	"	"	"	
" 27	"	"	胴 部	"	
" 28	"	"	"	"	
" 29	"	"	"	"	
" 30	"	常滑系	甕 底 部	暗 橙 色	
" 31	"	珠洲焼系	" 下半部	暗 灰 色	
" 32	"	"	" 口頸部	"	
" 33	90 - 17	"	" 胴 部	"	
" 34	90 - 20	常滑系	"	暗 橙 色	
" 35	"	珠洲焼系	"	暗 灰 色	
27 図 36	90 - 14	"	"	"	表 採
" 37	90 - 20	越前系	"	白 橙 色	
" 38	90 - 21	珠洲焼系	"	暗 灰 色	
" 39	"	"	下半部	"	
" 40	"	"	胴 部	"	
" 41	"	"	"	"	
" 42	"	"	"	"	
" 43	"	"	"	"	
" 44	"	"	"	"	綾杉状叩打痕
" 45	"	"	"	"	
" 46	"	"	"	"	綾杉状叩打痕
" 47	"	"	"	"	煤附着
" 48	"	"	"	"	"
" 49	"	"	"	"	"

の拓影図に示したとおりである。このほか内耳鍋の破片（耳あり）と赤褐色を呈する土器がある。後者には底部に楕円状の短い足を有する火鉢、常滑または越前陶系に属する口縁端部に大きな平面を有する大甕の破片などもあるが、図示からは除外した。

館跡からは須恵器の小さい破片が1点検出されたほかは、同系統のものとしては珠洲系のみである。ただ全型を知る資料がないので、器形の判断は完全にはできない。

珠洲系陶器の観察で気づいた点を記すと、表面に綾杉状の叩打痕のあるものは、内側に楕円状に凹む当て具の痕がみられる特徴がある。そして表面の叩痕の方向と、当て具の凹みの方向が一致しており、焼成も堅緻であるが口縁部の形態などは明確でない。出土層位も古いと思われる土塁の内部から検出されたが、これは、Ⅳ期に属する新潟県小千谷市岡林遺跡（嘉暦3年〈1328〉の青銅蔵骨器共伴）同十日町小黒沢遺跡（正平8年〈1353〉の丸石板碑）と類似しているので、高梨館のものも14世紀代の所産と考えられる。25図の6・8・10・27図の40・44～46などがそれに該当する。

これに比べ焼成がやや軟質で叩打の溝も間隔があり、しかも平行から右下りに叩打される厚手の一群は、調査地点（90-20）、（90-21）からまとまって出土している。これらは25図の18・26図23～29・32、27図の38・39・41・42・47・49などであり、輪積み痕、ロクロ整形痕のみられるものがある。出土地点からみると同一層から出土しているので、生産地の違いによるものと考えられるが、地点別の遺構全体のあり方からすれば、16世紀へと時代の下がる要素が認められる。

擂鉢は4点確認されている。このなかに口縁端部に面があり、ロクロで整形されたものがある。珠洲系陶器では、擂鉢は初期から面とりを施すとされているが、面とりの形態によりⅤ期の15世紀前半の所産と推定される。全国的にみると、西日本・北陸の諸窯では、鎌倉時代中頃から内面におろし目を刻むが、瀬戸・常滑などの東海地方の窯では室町時代後期までおろし目をもたないとされている。これらは、別項で報告した石ウスとともに、高梨氏らの生活様式を示すものである。

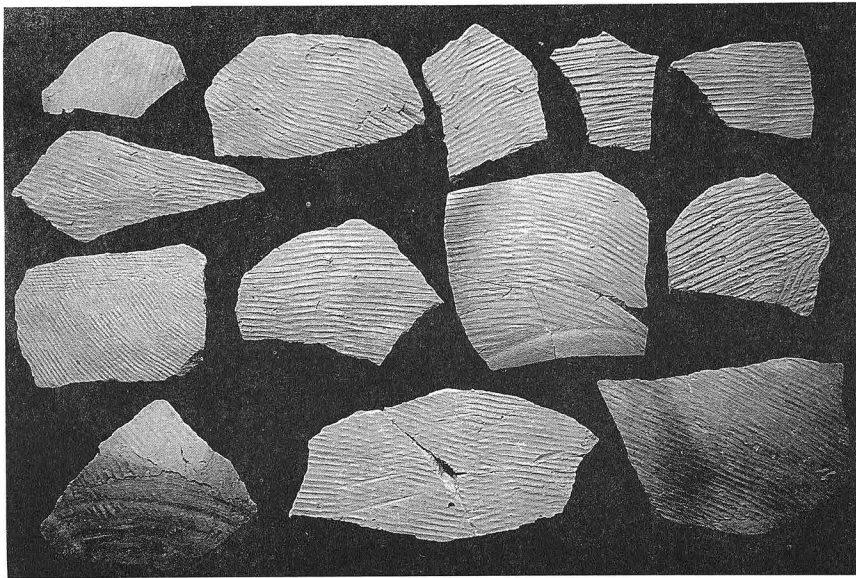
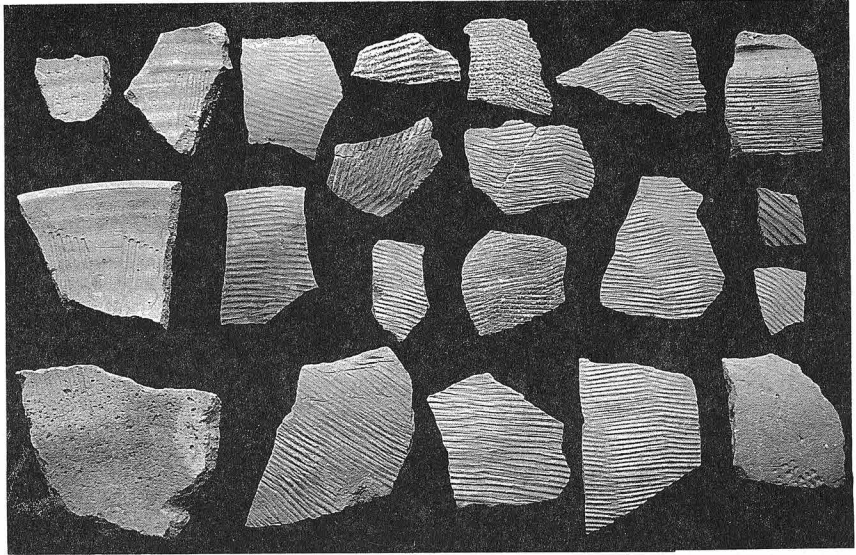
常滑系の陶器には、25図の15、26図の19・22・30・34などがある。15は、胴部に格子状の押印がみられ、赤褐色を呈する甕破片である。他は暗橙色を呈する甕破片で、石英粒などが顕著にみられる。19は、同系の甕の口縁破片で、大きく折り返した幅広い縁帯があり、14世紀からの常滑製品にみられるものである。常滑の甕は、市内新野の小曾崖城跡からも14世紀後半と推定されるものが採集されている。

越前系の陶器と推定されるものは、前年にも当館跡から出土しているが、今回も25図の37のような、白橙色を呈し、表面が平滑に研磨され、内面が横方向にナデられ砂質がかった胎土で硬く焼き締ったものが出土している。

越前陶器は鎌倉時代から製作され、北陸地方では戦国末期（16世紀）に珠洲焼の衰退に伴い、越前陶器が広範に流通したとされている。同時に中国陶磁にあっても、龍泉窯青磁から

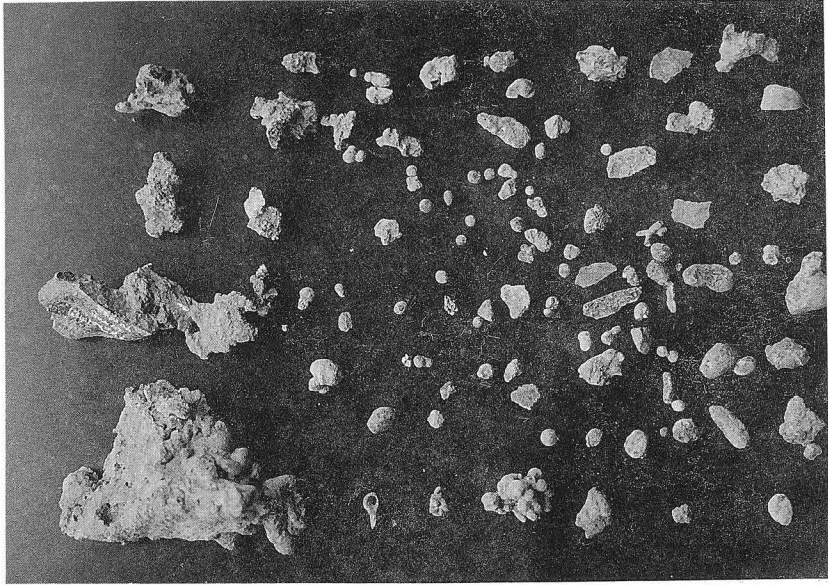
染付陶磁が主役の座を占めるようになる。

瓦質土器も従来から出土している。今回報告するのは1点のみだが、丸形の火鉢の破片と推定される。口縁は縁帯をつかって内面に広く、平滑に磨かれているが、口縁下に凹帯をつかって、その中に花菱文を連続押捺している。

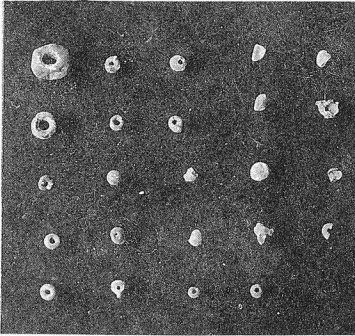


50↑ 珠洲系陶器
右下は常滑焼

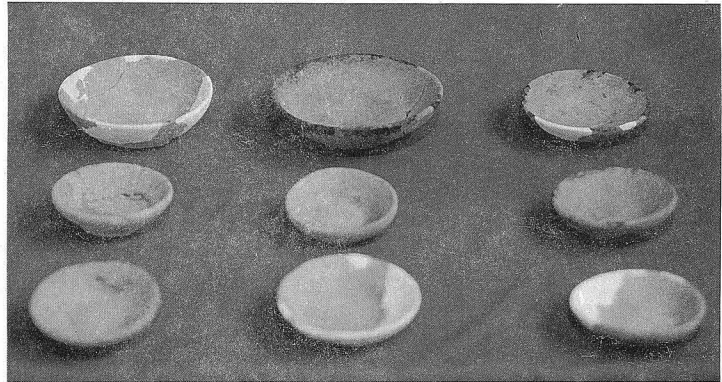
51← 同



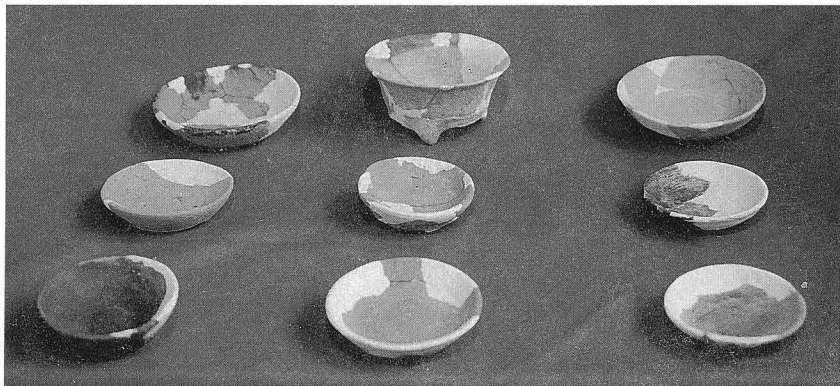
52↑ 東入口内側(90-09)焼土層出土の銅塊など



53↑ 同玉類
左上珊瑚玉(径9ミリ)



54↑ 館内出土の中世土師器(1)



55↑ 同 中央上三脚付火舎(香炉)

むすび

平成2年(1990)度の高梨館跡の調査は、6月21日から11月14日まで行った。この夏は炎暑きびしく、緑陰での憩いが思い出となった。

整備も2年度に入るということで、本年度の調査は土塁と堀の構造の究明に重点をおいた。その結果、被覆された土塁内の遺構や厚く堆積した堀などには、現代の開発の手がのびていないところが多かったので、新しい事実が判明した。

遺構についての成果を要約すると、次のとおりである。

1) 築地は現在までの調査で、南入口の両側、約20m以内の長さにわたって存在することが判明した。

2) 土塁は、時期によって庭園の南側のように張り出した部分があること、また北面土塁東側地点(90-18)のように、現状の土塁構築前の遺構が包蔵されている地点が(前年の築地遺構のほかにも)存在することが確認された。したがって、土塁の構築された時期の究明が、出土遺物と層序の検討によって行わなければならないとなった。

3) 堀は、戦国期のきびしい様相を示す幅と深さをもち、V字形を呈していることが確認された。わずかに埋設した段階で、黄色粘土層、石積みなどの遺構がみられることから、まだ未知の遺構の存在が予測され、全体的な遺構の把握が必要である。

4) 石積みは、庭園南側部分を除けば、土塁内側にはほとんどにわたり存在することが確認されたが、土塁裾部にある場合と北面のように中段にある場合がある。ほとんどは河原石であるが、一部には山石も用いている。裏込石はみられず、直角に近い積み方で、布目くずしの手法を用いているが、尻があがりて原形が崩れているところが多い。

次に遺物についての成果を要約すると、下記のとおりである。

土製品については、90%以上の出土率を占める中世土師器が問題である。これを遺構別に整理し、種別・系統を明確にして製作年代を知り、絶対年代を確定するという作業は、伝世の少ない生活雑器ゆえに可能と考えられる。現時点もある程度の見通しはあるが、調査終了後に早急に編年大綱を立てたい。

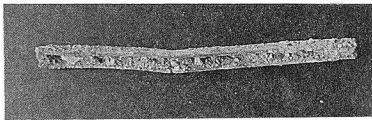
珠洲系陶器は、北信地方で比較的多く出土するのが特色である。これとともに中国陶磁も青磁・白磁・染付が小破片となって、建物跡あるいは土塁の覆土中から出土している。常滑・越前などの中世陶磁・瓦質土器・内耳土器なども同じ箇所出土している。これは、遺構の廃絶事情を物語るものとみられるが、これらの組成・製作地の究明によって、領主の交易、文化的な性格が把握されることも期待できる。

金属製品の出土も多彩で、また羽口の出土により、館内で鋳造や小鍛冶段階の金属加工が行われたことが推察される。

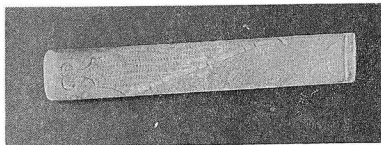
東入口の焼土層からは中世土師器・中国陶磁とともに、銅塊・銅製品破片・鉄釘・玉など

が出土し、御正体の破片のように鎌倉中期の製品かと思われるものも出土している。そして、かりに御正体が伝世品であるとしても、館の存続、先住者の有無をめぐって、今後の検討材料となろう。また館内の諸所から五輪塔の部分が出土し、石積みなどにも転用されたりしており、石臼その他の石製品も出土する。

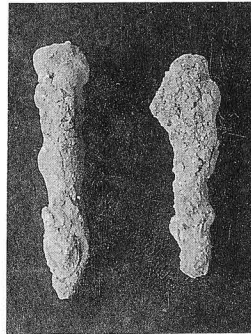
このように、遺構・遺物が端的に物語ってくれる支配者の領主館における姿を知ることによって、一般民衆層のあり方も間接的に知ることができるのではなかろうか。



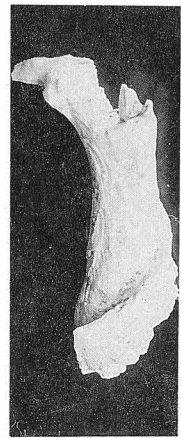
56↑ 東入口南側堀(90-10)
出土の銅製品



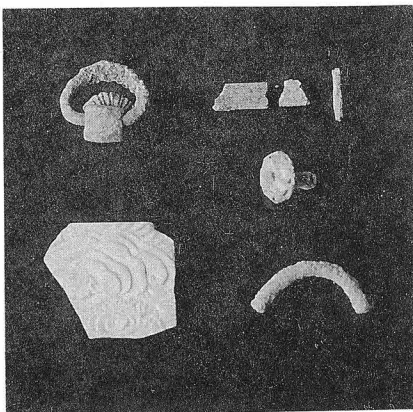
57↑ 北面東土壘内角出土の小柄



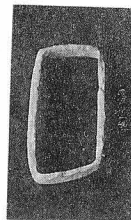
58↑ 東入口内側(90-09)焼土層出土の鉄釘



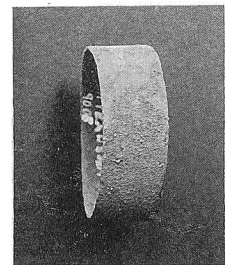
59↑ 同下層
出土の鹿角



60↑ 同 出土の諸品
左上 御正体吊環座
左下 瑞雲文彫刻石板



61↑ 東面南土壘内(90-08)
出土の銅環



62↑ 東入口南
側石積み出土の鐙(こじり)

图28 南面土壘·堀美测图

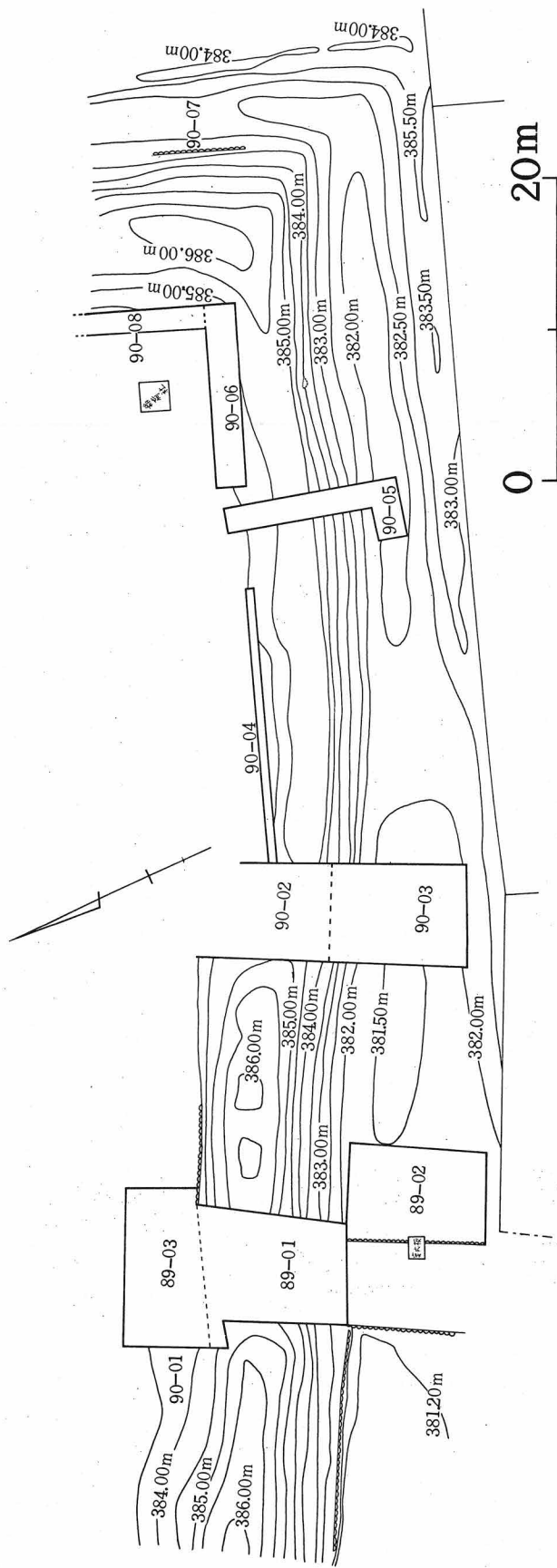
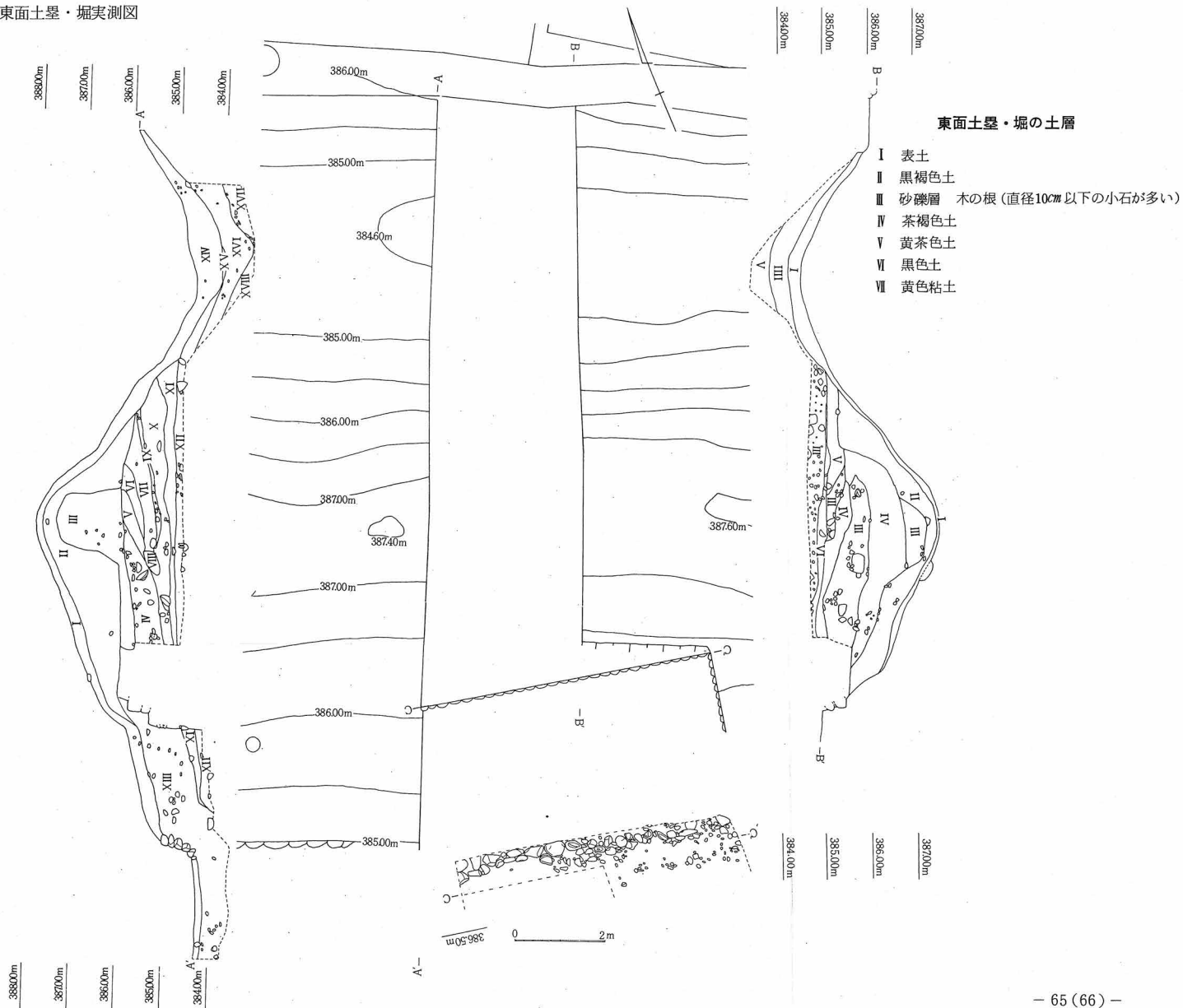


図29 東面土塁・堀実測図

東面土塁・堀の土層

- I 表土
- II 茶褐色土 (石混り)
- III 茶褐色土 (他より固めである)
- IV 薄黄色 砂礫層
- V 黄色 (砂混り)
- VI 黒色土
- VII 黄色 (土器混り)
- VIII 黄褐色土 (粘土混り)
- IX 砂礫層
- X 黄茶色土 (粘土混り)
- XI 黒色土 (粘土混り)
- XII 黄色 砂礫層
- XIII 黒褐色土 (石混り)
- XIV 第一層 腐植土
- XV 第二層 黒色土
- XVI 第三層 茶色 粘土層
- XVII 第四層 黒褐色土
- XVIII 第五層 黄茶色土 (石混り)



東面土塁・堀の土層

- I 表土
- II 黒褐色土
- III 砂礫層 木の根 (直径10cm以下の小石が多い)
- IV 茶褐色土
- V 黄茶色土
- VI 黒色土
- VII 黄色粘土

図30 北面土塁・堀実測図

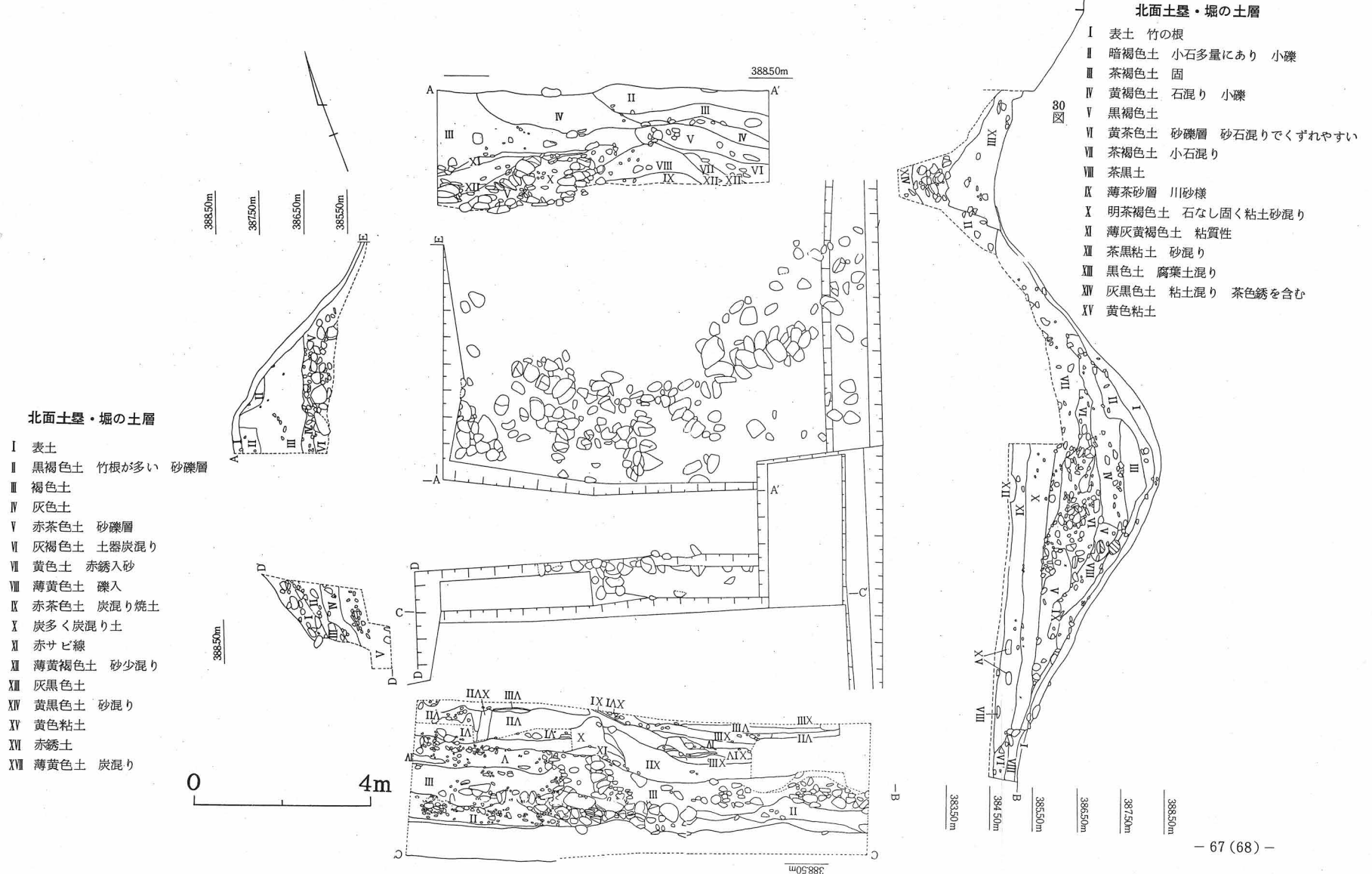
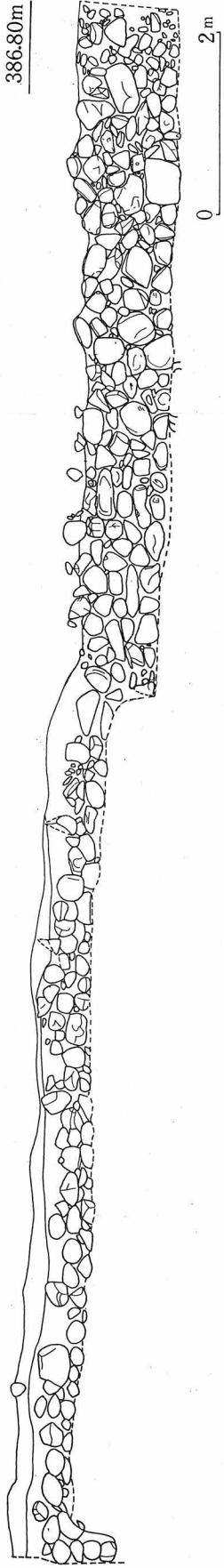
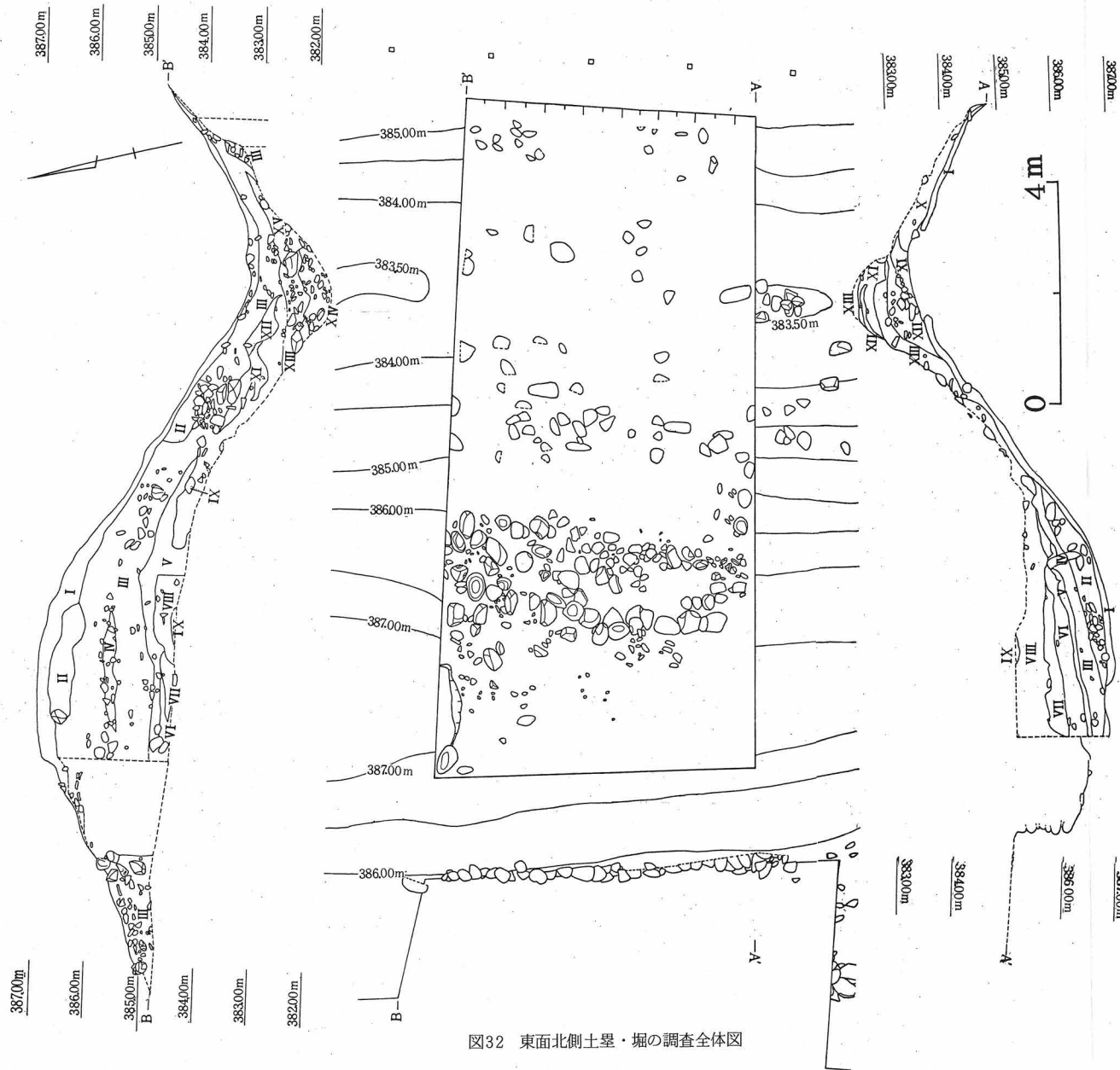


图31 東面土壘内部石積み実測図





- I 表土 腐植土
- II 黒褐色土 小礫含む 砂粒
- III 灰黒色土
- IV 薄灰色土 小礫含む
- V 灰褐色土 砂粒
- VI 薄灰褐色土 小砂利層
- VII 薄灰黄茶褐色土
- VIII 薄灰茶色土 砂層
- IX 黄茶褐色土 小礫含む
- X 灰茶褐色土
- XI 薄黄褐色土 砂粒含む
- XII 灰茶褐色土
- XIII 濃い黄茶褐色土 濃い色の鉄分含む砂利層
- XIV 黄茶褐色土 砂利層 薄い色の鉄分を含む
- XV 薄黒褐色土

図32 東面北側土壁・堀の調査全体図